

佐賀市文化財調査報告書第25集

大 日 遺 跡

——佐賀県運転免許センター建設に
伴う埋蔵文化財発掘調査報告書——

平成元年 3 月

佐賀市教育委員会

佐賀市文化財調査報告書第25集

大 日 遺 跡

——佐賀県運転免許センター建設に
伴う埋蔵文化財発掘調査報告書——

平成元年 3 月

佐賀市教育委員会

発刊にあたって

この報告書は、佐賀県運転免許センター建設事業に先がけて、佐賀市教育委員会が昭和63年度に調査を実施した大日遺跡の発掘調査報告書であります。

今回、調査を行いました大日遺跡は、奈良時代を主とする遺跡であり、掘立柱建物跡や土壌などの遺構が検出され、土師器、須恵器などの遺物が出土しました。また、江戸時代の遺構、遺物も確認されました。

特に奈良時代の遺構や遺物は、佐賀市において今まで空白部分であった奈良時代の様相を知る上で、貴重な資料であります。

今後、この報告書が、文化財保護の認識と理解を深め、歴史の解明に少しでも役立てば幸甚であります。

なお、今回の調査に際しまして、御協力いただいた佐賀県警察本部、佐賀県教育委員会、並びに地元の方々に対し、深甚の敬意を表します。

平成元年 3 月31日

佐賀市教育委員会

教育長 山 田 清 人

例 言

1. 本書は、佐賀県運転免許センター建設に伴い、昭和63年度に発掘調査を実施した大日遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、佐賀県警察本部の委託を受けて佐賀市教育委員会が実施した。
3. 遺構の実測は木島慎治と小柳恵子・副島カスミ・角田絹子・友添丸子・原京子・龍由美子
が、遺構・遺物の写真撮影は調査員が行った。
4. 出土遺物の接合・復元作業は鬼崎玲子が、実測・製図作業は島京子・木島慎治が、佐賀市
教育委員会文化財収蔵庫において行った。
5. 本書の執筆・編集は木島慎治が担当した。
6. 出土遺物及び実測図は、佐賀市高木町15番30号、佐賀市教育委員会文化財収蔵庫に保管し
ている。

凡 例

1. 遺構については一連番号を付し、それぞれ番号の前に、SB：掘立柱建物跡、SD：溝、
SK：土壌、SX：不明遺構及びその他の遺構、P：柱穴・小穴、の分類記号を付した。
2. 遺構の法量はm単位、遺物の法量はcm単位を原則として用いた。
3. 挿図・本文中に用いた方位はすべて座標北である。
4. 遺物実測図の中心線が一点破線となっているものは反転復元を表わす。
5. この遺跡の略号はDNCである。

本文目次

I. 序 説	1
(1) 調査にいたる経過	1
(2) 調査の組織	1
II. 遺跡の立地と環境	2
(1) 地理的環境	2
(2) 歴史的環境	2
III. 遺跡の概要	3
IV. 遺構と遺物	5
1. 遺構	5
(1) 掘立柱建物跡	5
(2) 土壌	16
(3) 溝	21
2. 遺物	23
(1) 奈良時代の遺物	23
(2) 江戸時代の遺物	29
V. 小 結	29

挿 図 目 次

Fig. 1	大日遺跡周辺遺跡分布図	3
Fig. 2	大日遺跡周辺見取図	4
Fig. 3	SB021 掘立柱建物跡実測図	5
Fig. 4	SB022・023 掘立柱建物跡実測図	6
Fig. 5	SB026 掘立柱建物跡実測図	7
Fig. 6	SB028 掘立柱建物跡実測図	8
Fig. 7	SB029 掘立柱建物跡実測図	9
Fig. 8	SB031・032 掘立柱建物跡実測図	10
Fig. 9	SB033 掘立柱建物跡実測図	10
Fig. 10	SB040 掘立柱建物跡実測図	11
Fig. 11	SB054・055 掘立柱建物跡実測図	11
Fig. 12	SB056 掘立柱建物跡実測図	12
Fig. 13	SB057 掘立柱建物跡実測図	13

Fig. 14	SB058 掘立柱建物跡実測図	13
Fig. 15	SB060 掘立柱建物跡実測図	14
Fig. 16	SB062 掘立柱建物跡実測図	15
Fig. 17	SB063 掘立柱建物跡実測図	16
Fig. 18	SK001 実測図	17
Fig. 19	SK007 実測図	17
Fig. 20	SK008 実測図	18
Fig. 21	SK009 実測図	18
Fig. 22	SK010 実測図	19
Fig. 23	SK037 実測図	19
Fig. 24	SK012 実測図	20
Fig. 25	SK039 実測図	21
Fig. 26	SK041 実測図	22
Fig. 27	SK044 実測図	22
Fig. 28	SK039 出土遺物実測図	25
Fig. 29	SK041 出土遺物実測図	27
Fig. 30	SK037・043・051 出土遺物実測図	28
Fig. 31	その他の出土遺物実測図	29
Fig. 32	江戸時代の出土遺物実測図	30
Fig. 33	大日遺跡遺構配置図	33

I. 序 説

(1) 調査に至る経過

昭和62年8月に佐賀県警察本部から開発計画が佐賀市教育委員会に提出された。それによると既存する佐賀県運転免許試験場に隣接し、以前は佐賀営林署の種苗事業所として利用されていた当該地に、新たに運転免許センター及び関連附属施設を建設したいとのことであった。建設予定地は周知の埋蔵文化財包蔵地であり、昭和62年10月に開発面積約20,000㎡について確認調査を実施した結果、遺跡の存在が確認された。そこで県教育委員会、県警察本部、市教育委員会の三者で協議を行い、遺構のひろがり認められる約2,000㎡について1988年（昭和63年）に本調査を実施することになった。本調査は1988年（昭和63年）5月17日から開始し、同年8月9日にすべての現場作業を終了した。

(2) 調査の組織

調査主体 佐賀市教育委員会

事務局 佐賀市教育委員会 社会教育課

参事兼課長 山口喜代治

課長補佐
兼文化係長 中野 和彦

事務吏員 甲木 亮一（庶務担当）

福田 義彦

木島 慎治（調査担当）

発掘作業員 畑瀬弘・森田ツルヨ・原ツル・小出賀澄・宮地富子・宮地峰子・大野ユキエ・

成富寿子・亀川すえみ・角田絹子・副島カスミ・原京子・友添丸子・龍由美子

調査協力 佐賀県警察本部・佐賀県教育委員会・久保泉土地改良区・山豊建設株式会社・

新九州測量設計株式会社・有限会社空中写真企画

II. 遺跡の立地と環境

(1) 地理的環境

佐賀市は佐賀県の東南部に位置し、東は神埼町・千代田町・諸富町、北及び西では大和町と接している。

佐賀市北部には脊振山系が東西に連なり、その南麓には大小の舌状丘陵が派生している。

大日遺跡はそれらの丘陵の一つに位置しており、標高は20～22m程度である。この丘陵は開発を受けて部分的に削平されてはいるが、ほぼ旧地形を残していると思われ、まだ南へ延びている。

(2) 歴史的環境

大日遺跡の位置する脊振山系南麓は非常に多くの遺跡が存在している。

旧石器時代では、藤付E遺跡で台形石器・細石刃などが出土しているが、現在のところ明確な遺跡は知られていない。

縄文時代では、前期・後期・晩期の土器・石器を出土した大門遺跡、久保泉丸山遺跡の支石墓群がある。

弥生時代では、甕棺墓群を検出した東千布遺跡、50基以上の住居跡を検出した琵琶原遺跡や、久富遺跡、立野遺跡など多くの遺跡が存在する。

古墳時代に入ると、脊振山麓は古墳群の中心地をなす。幾何学文の線刻を有する家形石棺をもつ西隈古墳、移設保存された久保泉丸山遺跡をはじめとして、大門古墳群、黒土原古墳群、金立古墳群、西原古墳群、金立開拓遺跡などが知られており、若干南へ下ると県内屈指の規模の前方後円墳である銚子塚が存在している。墳墓以外では、琵琶原遺跡や泉三本栗遺跡で住居跡が検出されている。また、山城説が有力である帯隈山神籠石も古墳時代の所産と考えられている。しかし、古墳時代における集落跡の調査例は少なく今後に期待される。

歴史時代では、古代のものとして上和泉遺跡、中世のものとして村徳永遺跡などが調査されているが、調査数はかなり少ない。しかし、西隣する大和町においては、肥前国府跡、肥前国分寺跡、惣座遺跡など数多くの古代の遺跡が存在することから、佐賀市内においてもその時代の遺跡の存在が予想される。

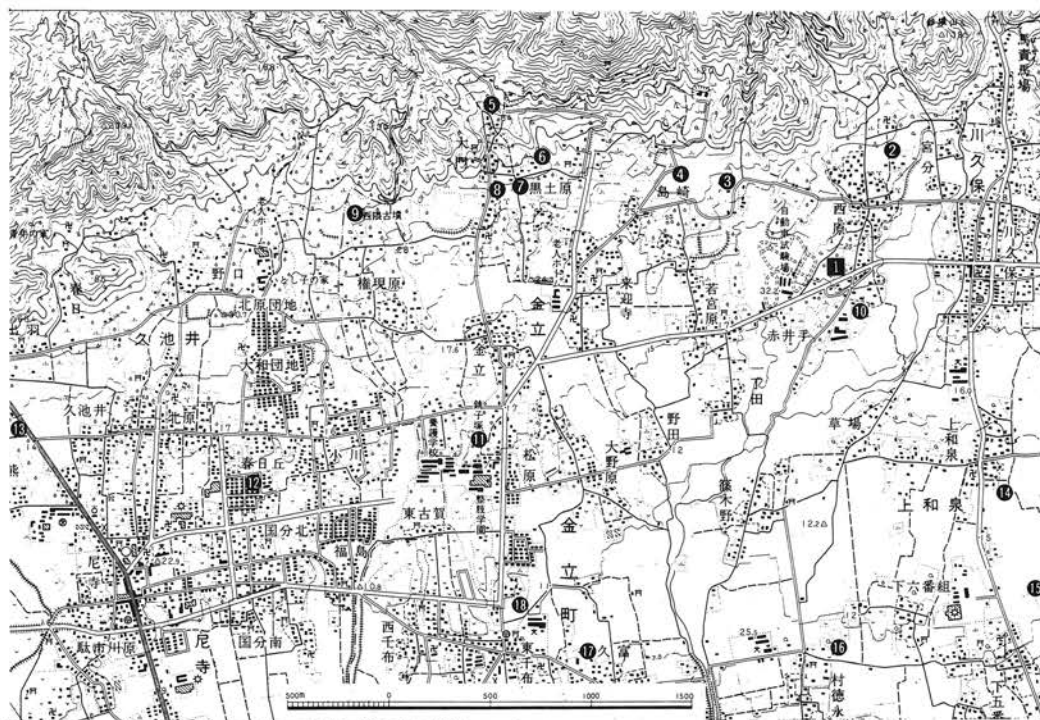


Fig. 1 大日遺跡周辺遺跡分布図

- | | | | |
|---------|---------|-----------|----------|
| ① 大日遺跡 | ② 西原古墳群 | ③ 久保泉丸山遺跡 | ④ 金立開拓遺跡 |
| ⑤ 大門古墳群 | ⑥ 黒土原遺跡 | ⑦ 金立古墳群 | ⑧ 大門遺跡 |
| ⑨ 西限古墳 | ⑩ 琵琶原遺跡 | ⑪ 銚子塚 | ⑫ 肥前国分寺跡 |
| ⑬ 肥前国府跡 | ⑭ 上和泉遺跡 | ⑮ 泉三本栗遺跡 | ⑯ 村徳永遺跡 |
| ⑰ 久富遺跡 | ⑱ 東千布遺跡 | | |

III. 遺跡の概要

今回の調査では、掘立柱建物跡、土塙状遺構、溝、多数のピット群等を検出した。遺構の時期については後述するが、出土遺物から判断すれば、奈良時代に属するものと江戸時代に属するものの二つに大別できそうである。遺構は調査区の全面に広がっているが、江戸時代の遺構が調査区北部に、奈良時代に属する遺構が調査区中央部から南部にかけて集中しているようである。遺構の埋土は、その殆どが黒褐色かそれに類する土色を呈しており、遺構の切り合いにより時期の先後関係を判断するのは非常に困難であった。全体的に遺構の残り具合は良好であるが、部分的に激しく攪乱を受けているものも存在した。地山は一部に変化がみられるものの基本的には黄褐色砂質土である。

出土遺物は、土師器・須恵器を中心として、江戸時代の所産である土師質土器・陶器・磁器等

もある。しかし、全体的に遺物の出土量は多くはなく、しかも細片であるため図化しえなかったものも少なくない。比較的良好な資料を出土したのは土壌2～3基であった。

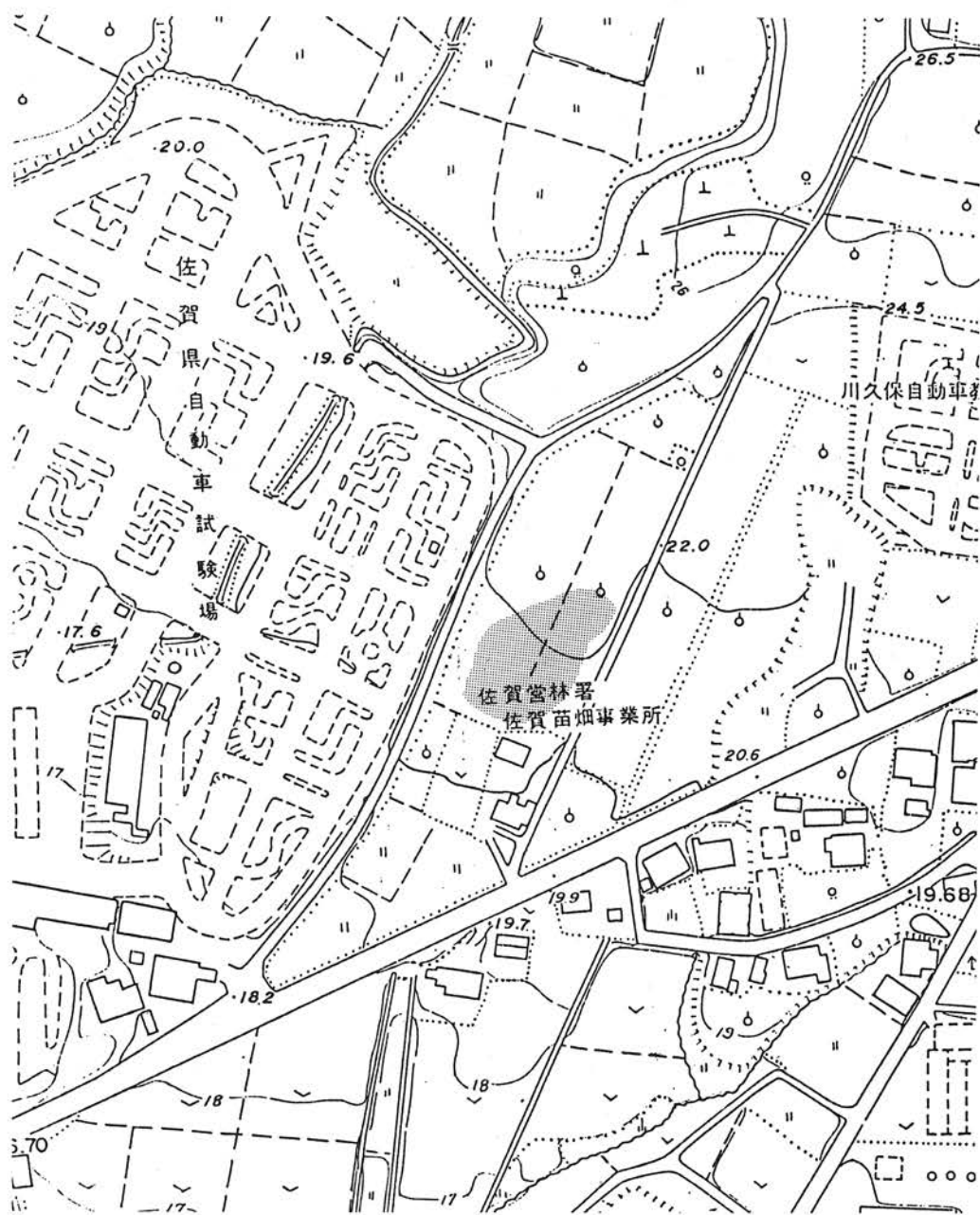


Fig. 2 大日遺跡周辺見取図 (S = 1/2,500)

IV. 遺構と遺物

1. 遺構 (Fig. 3～Fig. 27)

(1) 掘立柱建物跡 (Fig. 3～Fig. 17)

今回の調査で17棟を確認した。なお、柱筋には多少出入りがあると考えられるため、各柱穴の形状より想定した中心点間の測定距離を柱間寸法として図中に記載している。また、文章中の建物方位は座標北に対する建物南北軸の傾きである。

S B021 (Fig. 3)

2間×2間の総柱の建物である。調査区北部に位置し、南西隅の柱穴は、その一部を土壌(S K012)に切られている。建物方位は東へ15度傾いている。柱穴は直径約0.3～0.5mを測り、ほぼ円形の平面形を呈している。深さは0.2m程度と浅く、削平を受けている可能性がある。この建物だけが他の建物群から遠く離れて存在する。

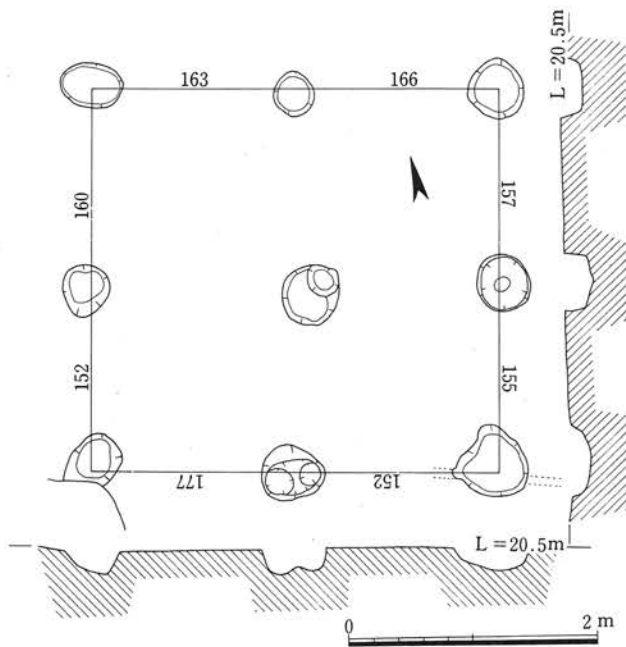


Fig. 3 SB021 掘立柱建物跡実測図 (S = 1/60)

S B022・S B023 (Fig. 4)

両者は重複して存在し、調査区中央東部に位置する。建物方位は、S B022が東へ9度20分、S B023が東へ9度30分傾いており、ほぼ同一方向である。柱穴については、S B022は直径

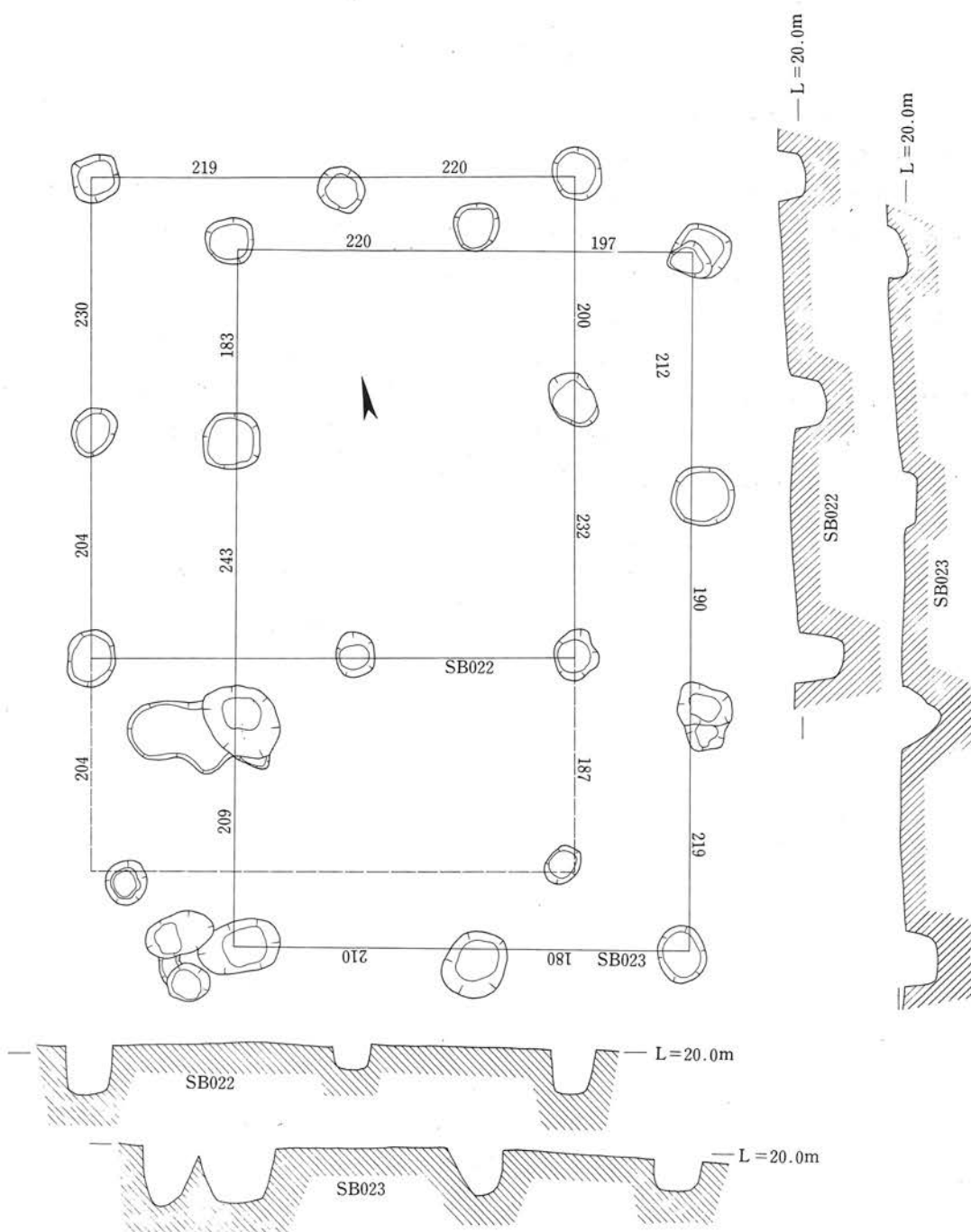


Fig. 4 SB022・023 掘立柱建物跡実測図 (S = 1/60)

0.35~0.45mの円形ないしは楕円形の平面形を呈し、深さは0.25~0.5mであり、SB023は直径0.45~0.65mの円形ないしは楕円形の平面形で、深さは0.2~0.5mを測る。SB023は2間×

3間の建物であり、S B022については2間×2間で南面に廂をもったものと考えたい。建物規模はほぼ同一であるが、柱穴規模はS B022のものが若干小さい。柱穴の切り合いがないため前後関係は不明だが、建替えの可能性が高い。

S B026 (Fig. 5)

2間×2間の総柱の建物である。S B022・S B023の南に位置し、北側の柱穴は溝(S D025)と切合っている。建物方位は東に10度傾いている。柱穴は円形の平面形をもち、直径0.3m前後とやや小型であり、深さは約0.3mである。北側中央の柱穴はかなり外にはみだしている。溝(S D025)との前後関係は不明であった。

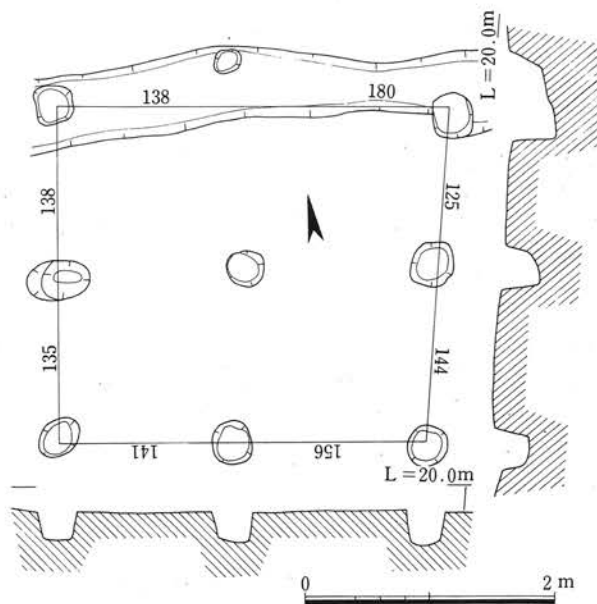


Fig. 5 SB026 掘立柱建物跡実測図 (S = 1/60)

S B028 (Fig. 6)

調査区中央東部に位置し、基本的には2間×3間の建物である。南側梁筋の内側に規模の小さい柱穴が存在する。建物方位は東へ2度傾いている。

S B029 (Fig. 7)

基本的には2間×5間の建物である。調査区中央部に位置し、建物方位は西に4度30分傾いている。柱穴の平面形は円形ないしは楕円形で直径約0.3~0.6mを測り、深さは0.2~0.7mである。現代の攪乱により、東側桁行の柱穴の一部が削平を受けている。東側桁筋の柱穴は、中央部の2つの柱穴と建物隅の柱穴との間にそれぞれ1つ柱穴を置く配列となっており、西側桁筋の柱穴も柱間寸法から判断して同じような配列であったとも考えられる。しかし、西側桁筋に

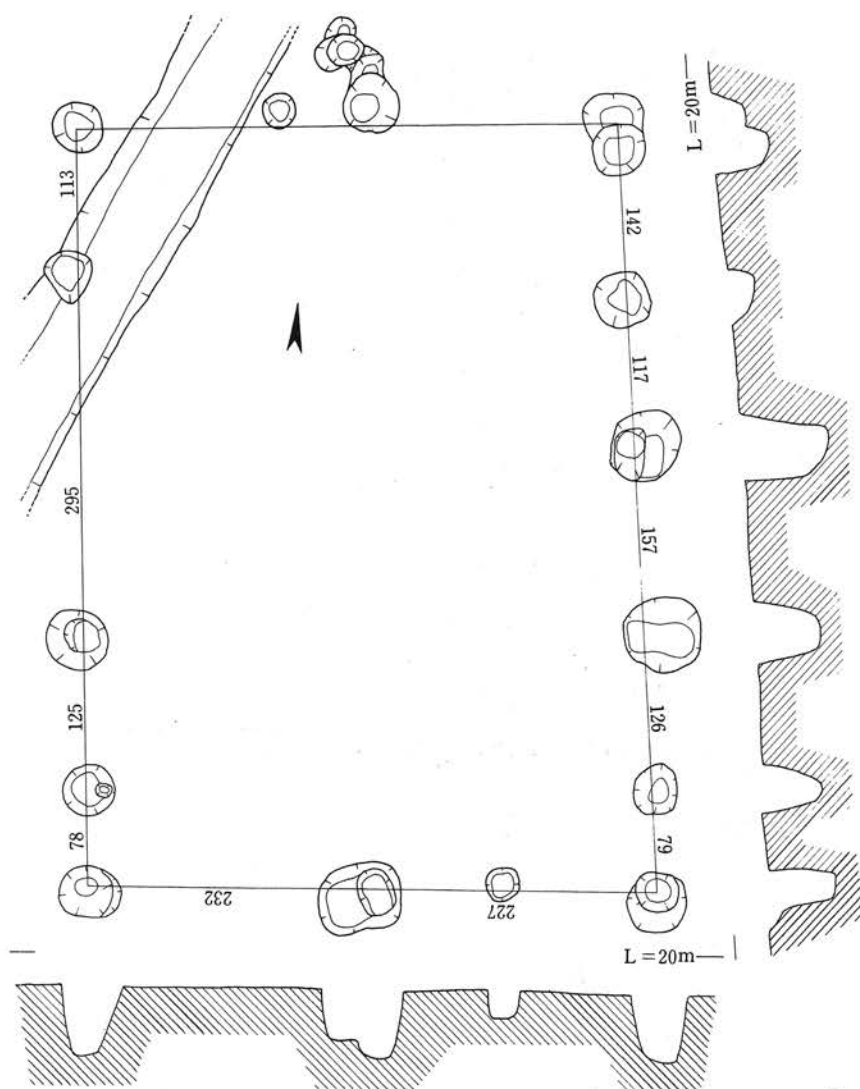


Fig. 7 SB029 掘立柱建物跡 (S = 1/60)

を測る。建物方位は西に1度傾いている。SB032は2間×2間の建物で、南側梁筋中央部の柱穴がないため総柱とはならない。柱穴はSB031のものとほぼ同形・同規模である。建物方位は東へ6度傾いている。

部分的に柱を利用した建替えと考えるが、その前後関係は不明である。

SB033 (Fig. 9)

2間×2間の総柱の建物で、調査区中央部SB031に南隣する。建物方位は西へ2度傾いている。柱穴の平面形は多くが直径0.45~0.7mの円形で、深さは0.3~0.6mを測る。柱穴の多くは

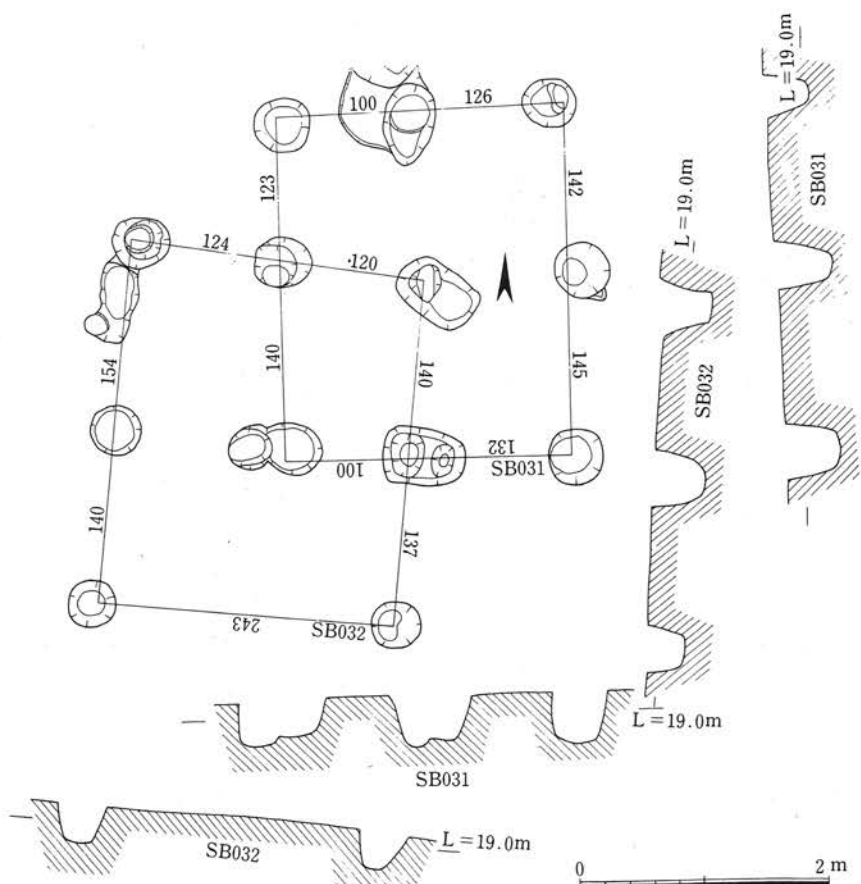


Fig. 8 SB031・032 掘立柱建物跡実測図 (S = 1/60)

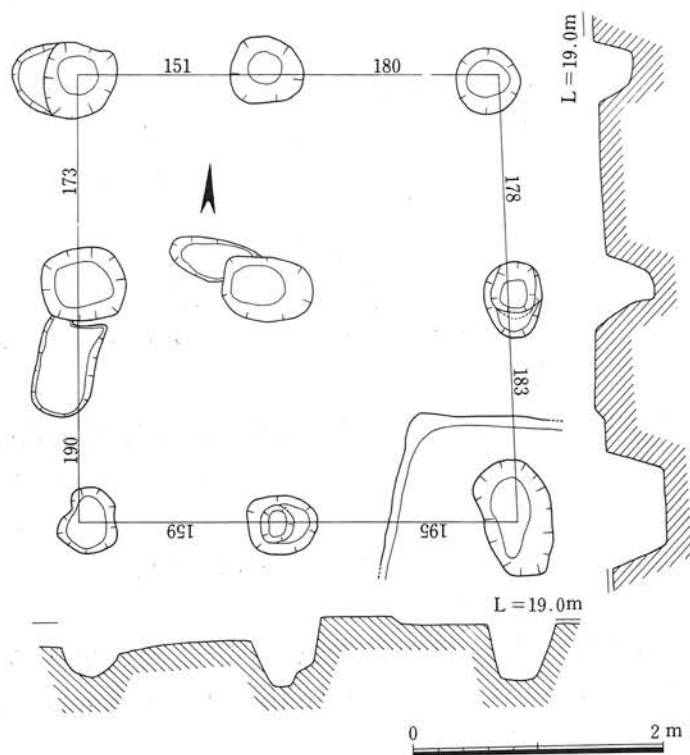


Fig. 9 SB033 掘立柱建物跡実測図 (S = 1/60)

攪乱により削平を受けているが、本来は同規模の柱穴で建てられたと思われる。

S B040 (Fig. 10)

2間×2間の建物である。調査区中央東部に位置する。柱穴の多くは直径0.3～0.4mの円形で、深さは0.2～0.4mである。部分的に削平を受けている。建物方位は西に1度傾いている。

S B054・S B055 (Fig. 11)

調査区南西部に位置し、重複して存在する。S B054は2間×2間の建物で、建物方位は東へ7度40分傾いている。S B055は2間×2間の建物で、建物方位は東へ2度傾いている。柱穴の

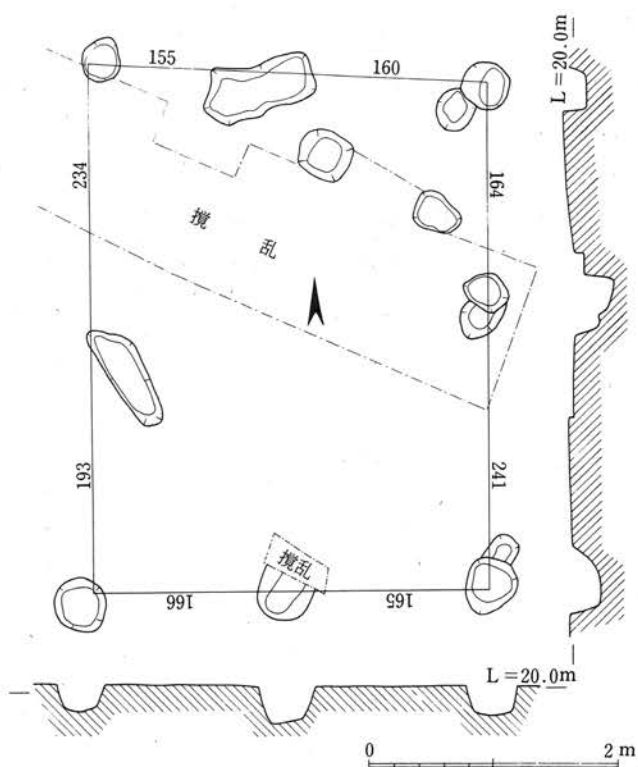


Fig. 10 SB040 掘立柱建物跡実測図 (S = 1/60)

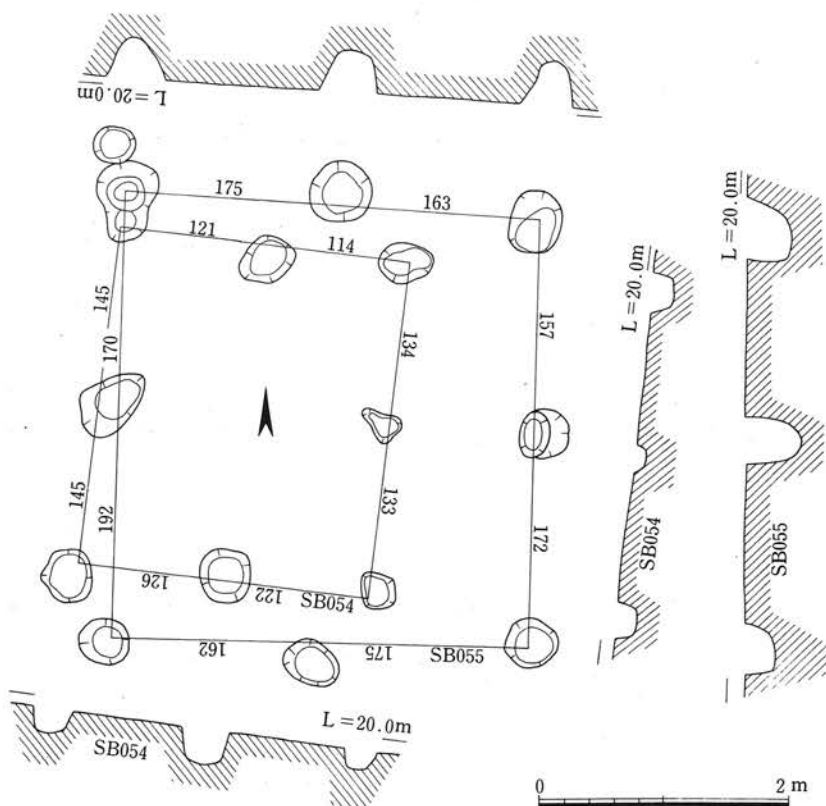


Fig. 11 SB054・055 掘立柱建物実測図 (S = 1/60)

平面形は直径0.4～0.5mの円形で、深さは0.3～0.5mである。

S B056 (Fig. 12)

調査区の西部に位置し、梁筋は2間、北側桁筋は4間、南側桁筋は3間に変則的な柱穴配置の建物である。建物方位は東へ5度傾いている。柱穴はその平面形が直径0.4～0.5mのほぼ円形で、深さは0.3～0.5mであるが、直径0.25m深さ0.1mの小型のものが1ヶ所存在する。掘立柱建物群中で東西方向の桁筋を持つのはこの1棟だけである。

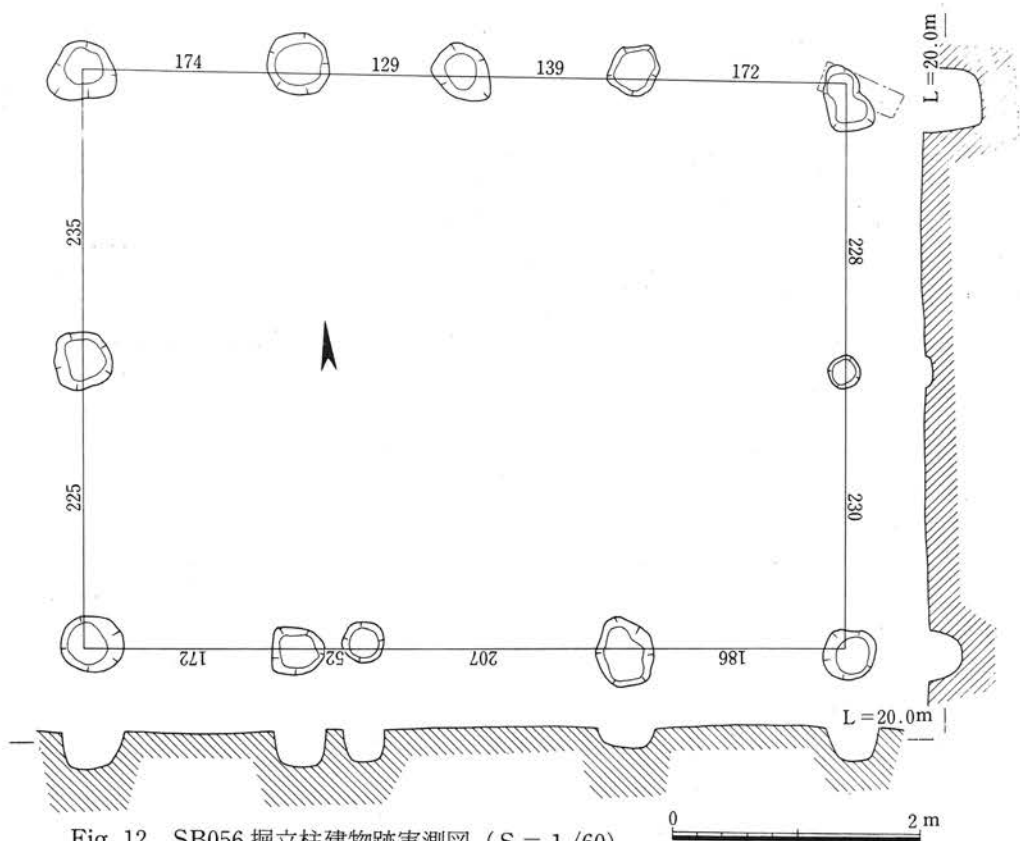


Fig. 12 SB056 掘立柱建物跡実測図 (S = 1/60)

S B057 (Fig. 13)

基本的には2間×2間の建物だが、西側桁筋は3間になっている。柱穴は直径0.4mの円形の平面形をもち、深さは0.1～0.5mである。建物方位は東へ2度傾いている。S B056と一部重なっているが、柱穴の切合いはない。

S B058 (Fig. 14)

調査区南部に位置し、建物群の中では最大規模のものである。2間×4間の建物を基調とし、東西両側に廂を設けている。柱穴は、直径約0.4mの円形の平面形を基本とし、深さ0.2～0.5mを測る。建物方位は東へ9度40分傾いている。また、この建物の柱穴数基については柱痕が検出されており、柱径は約0.35mであった。

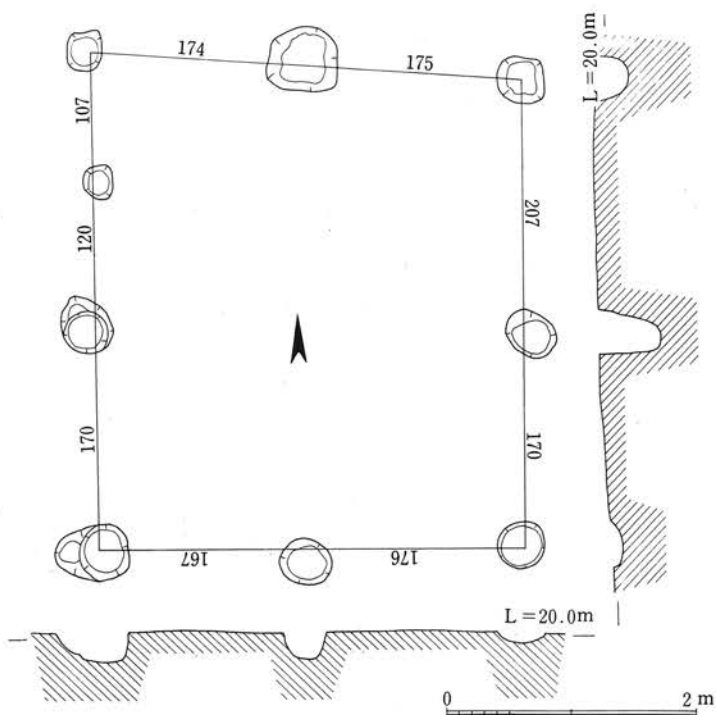


Fig. 13 SB057 掘立柱建物跡実測図 (S = 1/60)

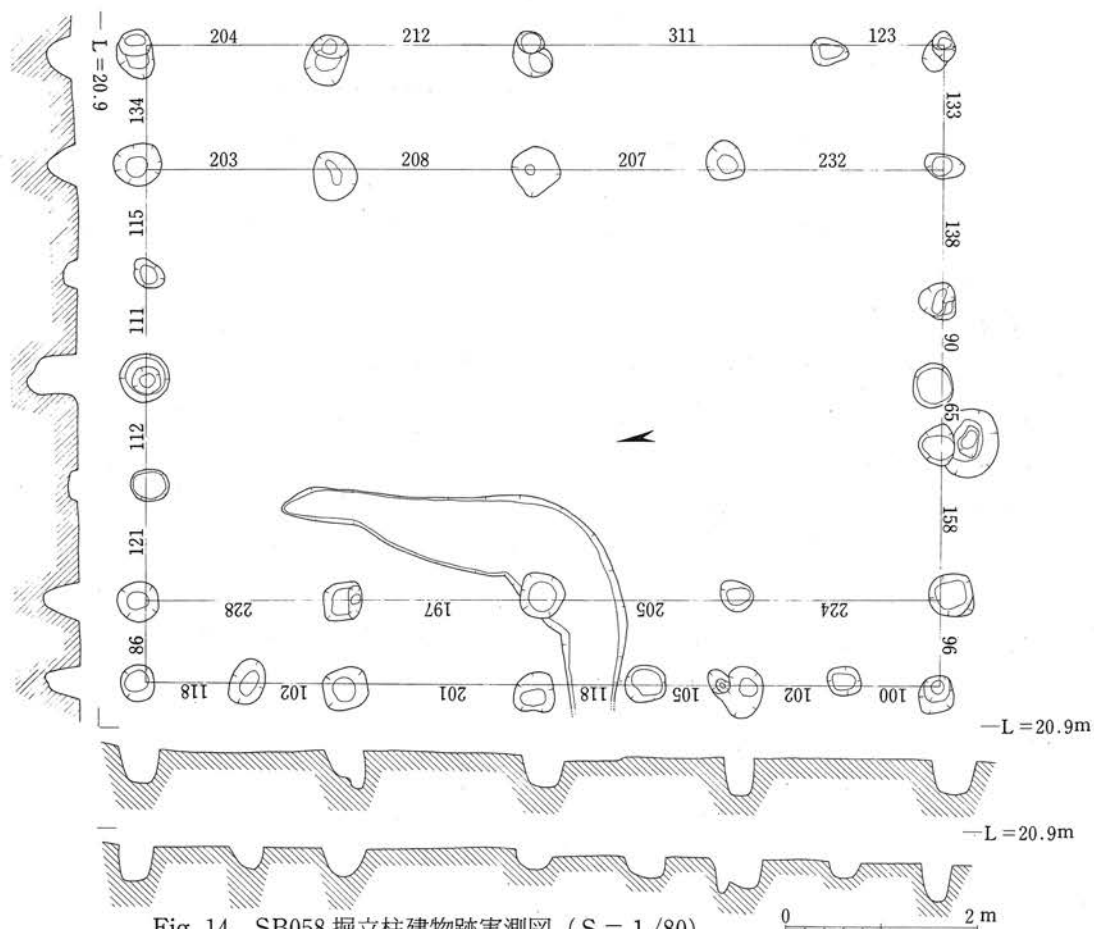


Fig. 14 SB058 掘立柱建物跡実測図 (S = 1/80)

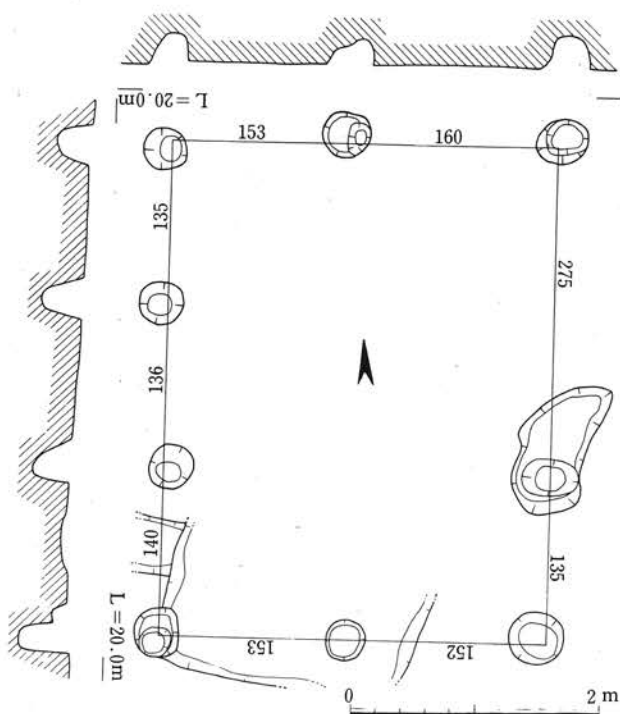


Fig. 15 S B060 掘立柱建物跡実測図 (S = 1/60)

なお、身舎の梁筋は正確には4間であるが、柱間寸法から判断すれば、2間の各柱間に柱穴を配したと考えるのが妥当であろう。

S B060 (Fig. 15)

調査区南西部に位置する2間×3間の建物である。柱穴は部分的に削平をうけているが、平面形は直径0.3～0.4mの円形で、深さ0.3～0.4mである。建物方位は、東へ5度傾いている。

S B062 (Fig. 16)

調査区東端に位置している。建物方位は東へ10度傾いている。桁行は4間で、梁行は1間から3間と一定しない。北側には廂をもつと考えられる。全体的に柱穴は浅い。

S B063 (Fig. 17)

調査区南西隅に位置する。基本的には4間×4間の建物であるが、部分的に柱間数が異なっている。南側が廂部になると思われる。柱穴はほぼ円形で、深さは0.4～0.5m程度である。建物方位は東へ6度30分傾いている。

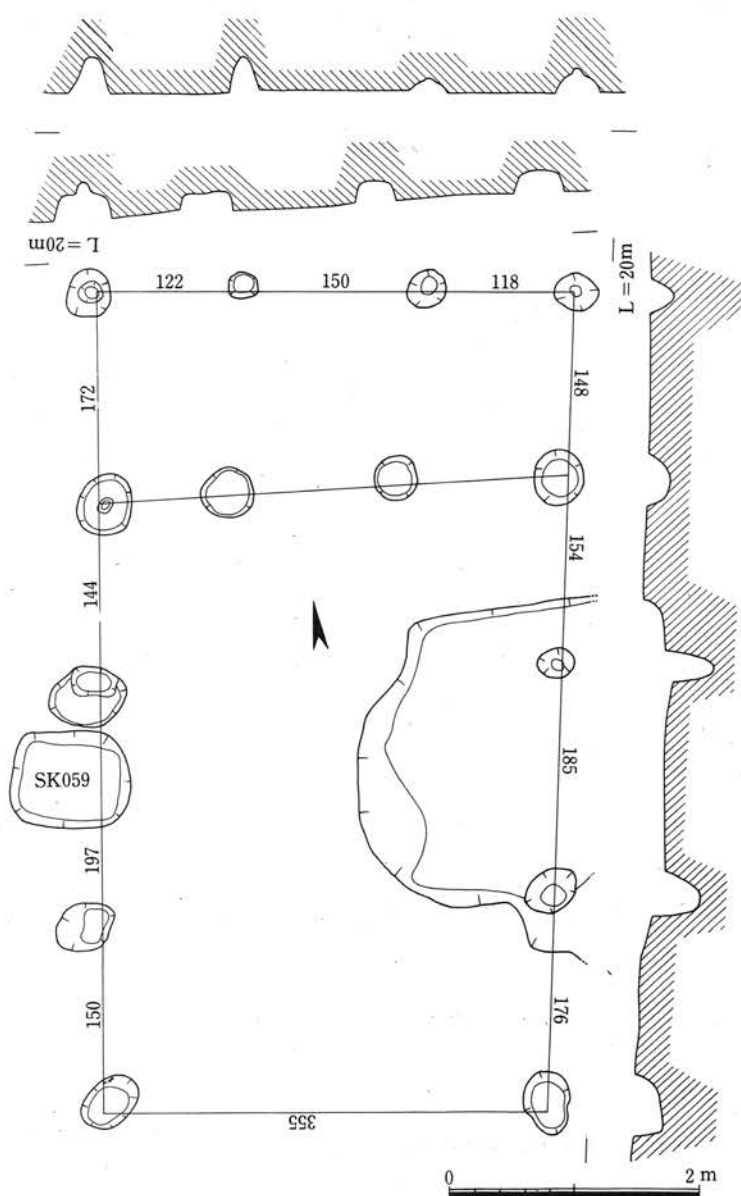


Fig. 16 SB062掘立柱建物跡実測図 ($S = 1/60$)

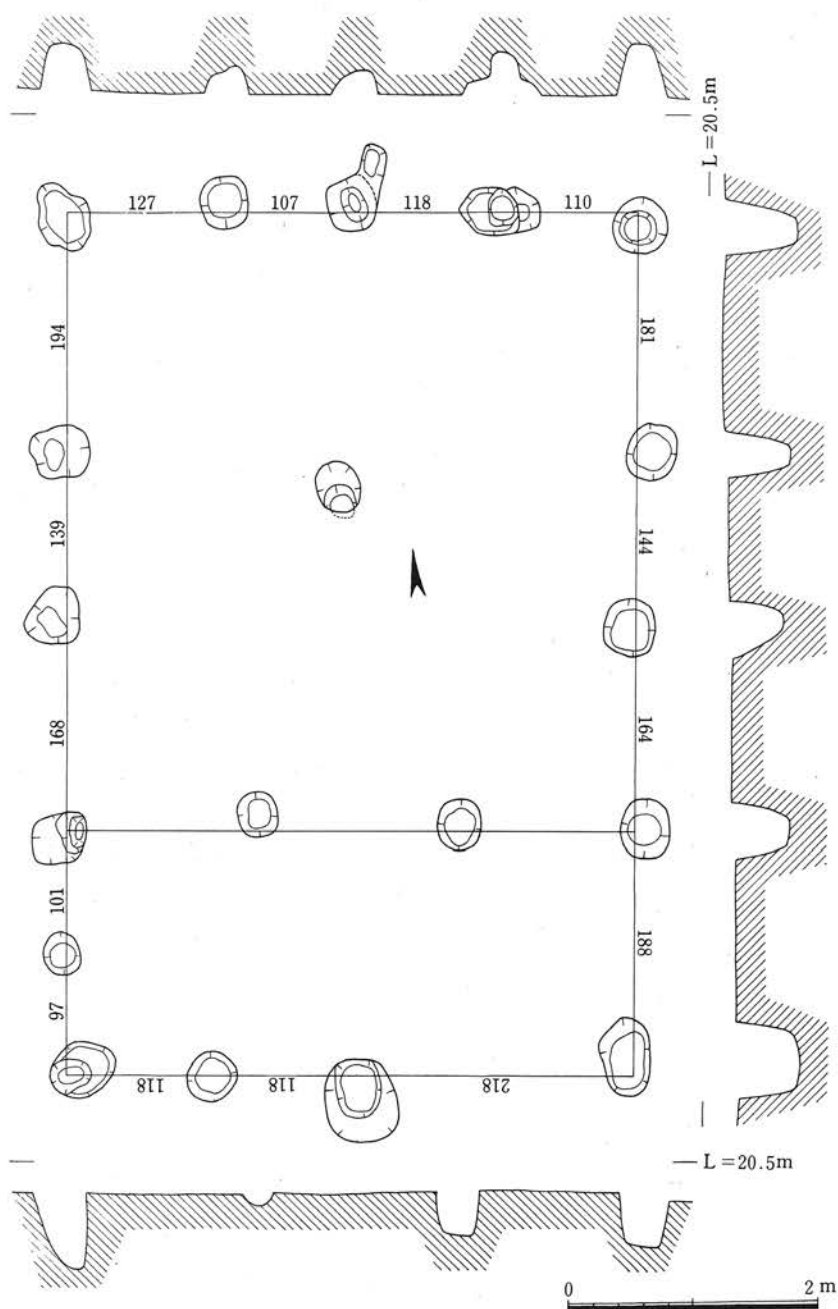


Fig. 17 SB063 掘立柱建物跡実測図 (S = 1/60)

(2) 土 壌 (Fig. 18~Fig. 27)

S K001 (Fig. 18)

調査区北端に位置する。平面形は長軸3.9m、短軸2mの隅丸長方形を呈し、深さは約0.5mを測る。床面は中央部に向かって緩やかに傾斜する。3層に分層したが、特に遺物の集中する層もなく、遺物も土器細片が少量出土しただけであった。

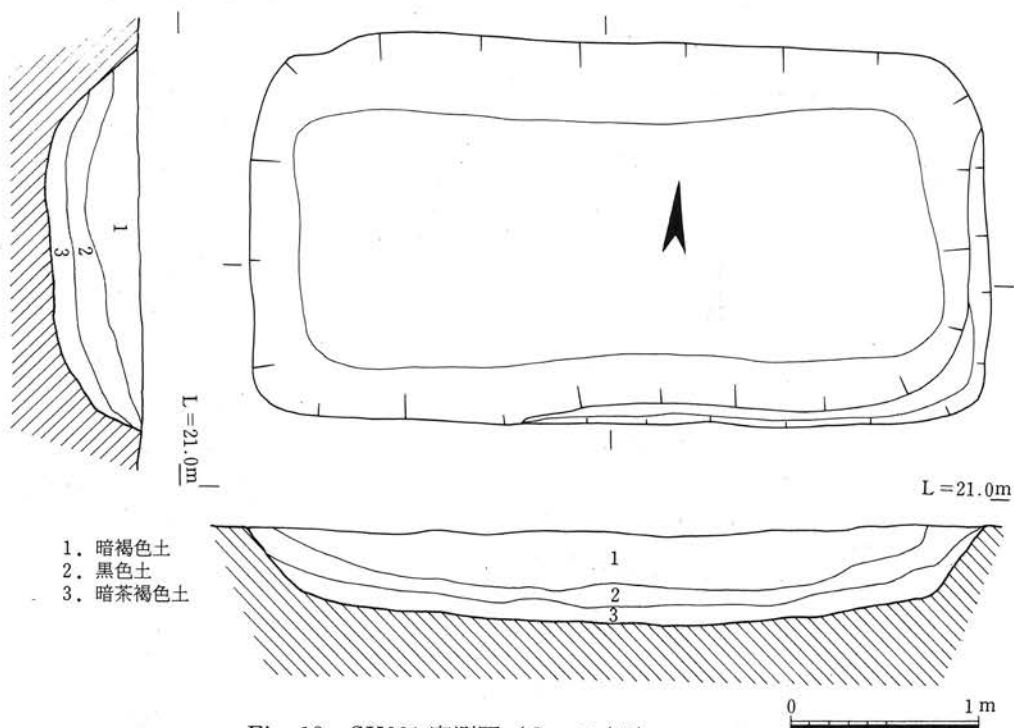


Fig. 18 SK001 実測図 (S = 1/40)

S K007

(Fig. 19)

調査区北部に位置する。遺構西部が攪乱を受けているため平面形は不明だが、おそらく隅丸長形状を呈すると思われる、深さは約0.4mを測る。遺物は殆どが土器細片で図示できたものは1点のみであるが、江戸時代の遺物は含まれておらず、すべ

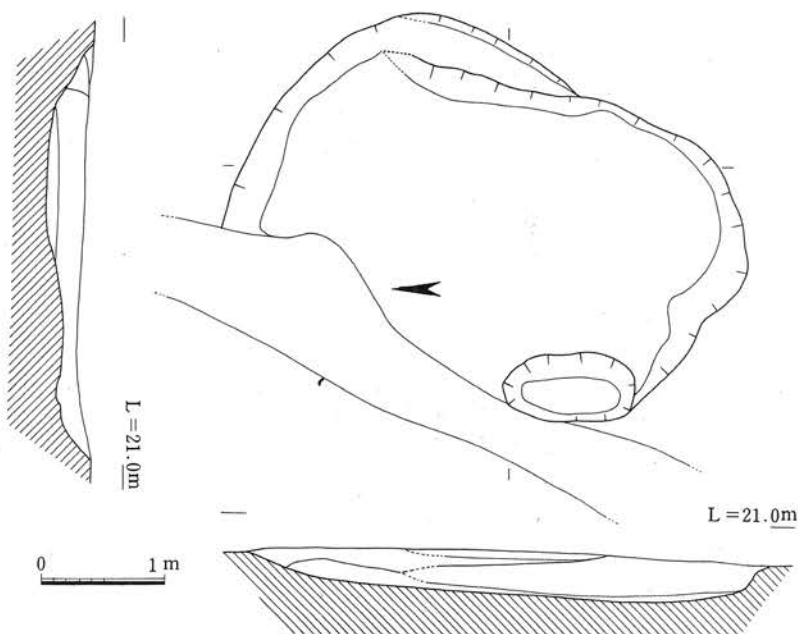


Fig. 19 SK007実測図 (S = 1/60)

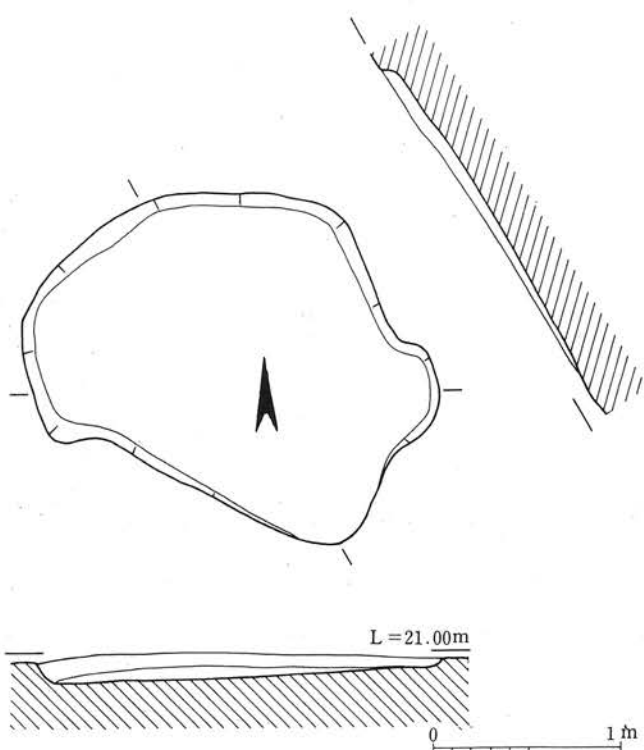


Fig. 20 SK008 実測図 (S = 1/40)

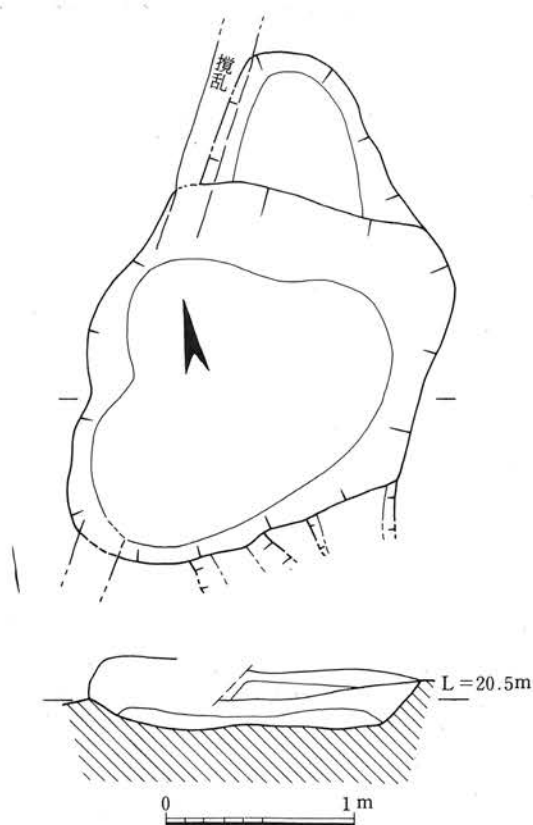


Fig. 21 SK009 実測図 (S = 1/40)

て奈良時代の土器と考えられた。

S K008 (Fig. 20)

調査区北部に位置し、平面形は東西幅1.7m、南北幅1.8mの不定形を呈する。上面を削平しており、検出時には深さ0.1m程度が残存していた。遺物はすべて江戸時代のものである。

S K009 (Fig. 21)

調査区北部に位置する。平面形は長径2.5m、短径1.8mの不整楕円形を呈し、深さは約0.4mを測る。部分的に現代の攪乱を受けている。江戸時代の遺物を出土している。

S K010 (Fig. 22)

調査区北部に位置する。平面形は一辺が約2.2mの隅丸方形を基調とし、東部に半円形の浅い掘り込みをもつ。遺構中央部は攪乱を受け削平されている。残存部の深さは約0.2mを測る。

S K012 (Fig. 24)

調査区北部に位置する。平面形は東西軸4.5m、南北軸3.3mの長方形を基調としており、最深部は1.2mを測る。北東部でS B021と切り合っていたが、前後関係は不明であった。出土土器

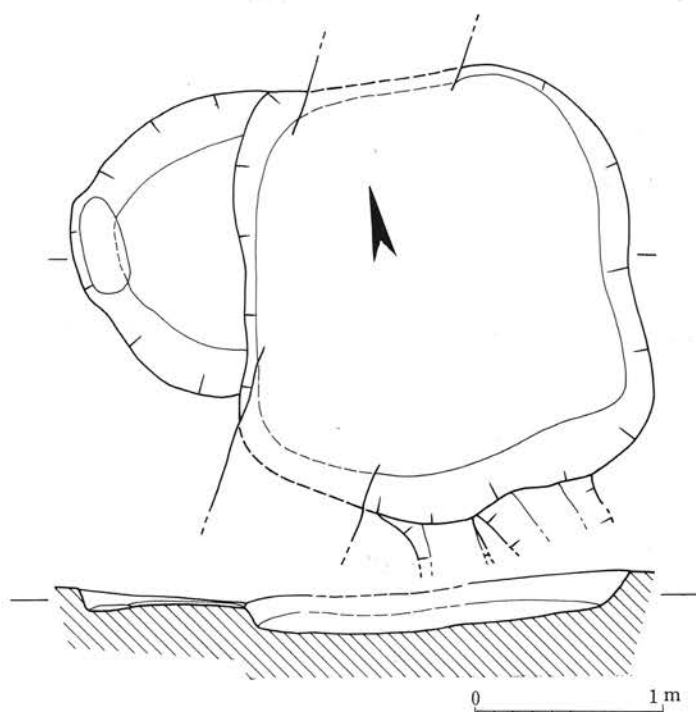


Fig. 22 SK010 実測図 (S = 1/40)

はいずれも細片であり、少量しか検出できなかった。

S K037 (Fig. 23)

調査区南西隅に位置する。平面形は南北軸約1.6mの不整形方を呈する。深さは約0.8mを測る。断面は逆台形状を呈する。遺物の出土量は少ないが、須恵器・土師器が床面付近から出土している。

S K039 (Fig. 25)

調査区南西部に位置する。平面形は南北最大幅4m、東西最大幅4.4mの不定形を呈し、最も深いところで1mを測る。埋土は8層に分層でき、特に第4層は焼土状の土層である。土師器・須恵器も比較的良好な資料が第4層を除く各層から出土している。

S K041 (Fig. 26)

調査区東部に位置する。平面形は長軸約3.2m、短軸約2.3mの不整楕円形を呈し、深さ約

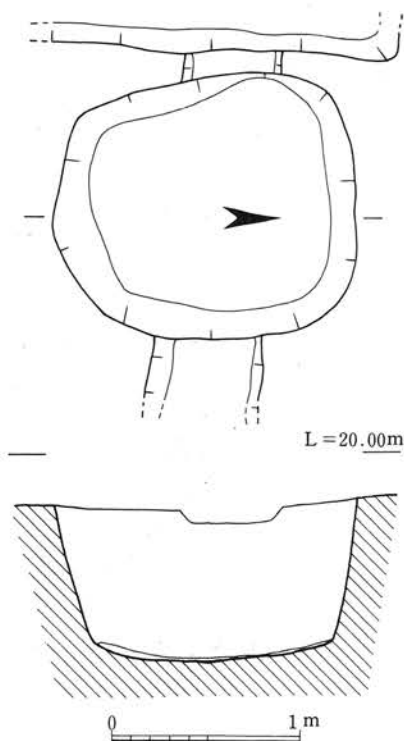


Fig. 23 SK037 実測図 (S = 1/40)

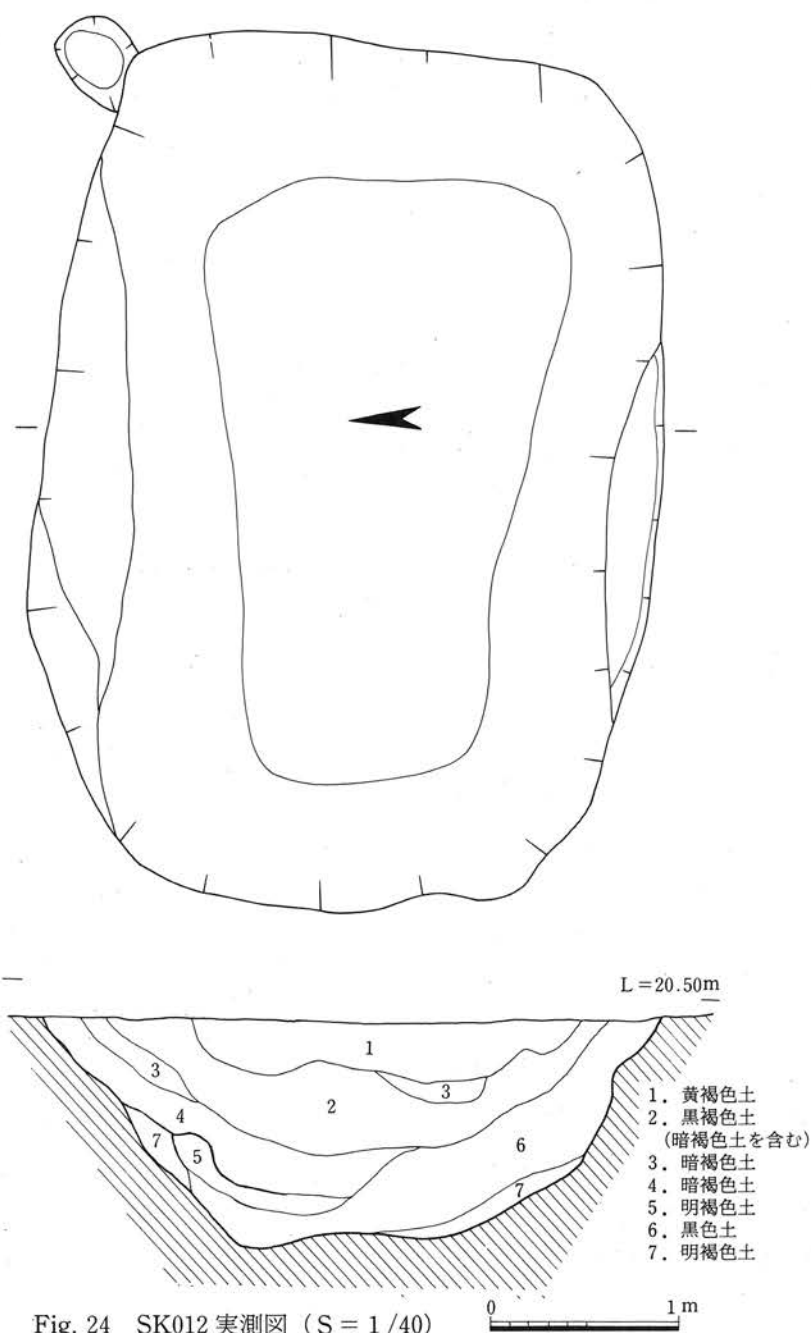


Fig. 24 SK012 実測図 (S = 1/40)

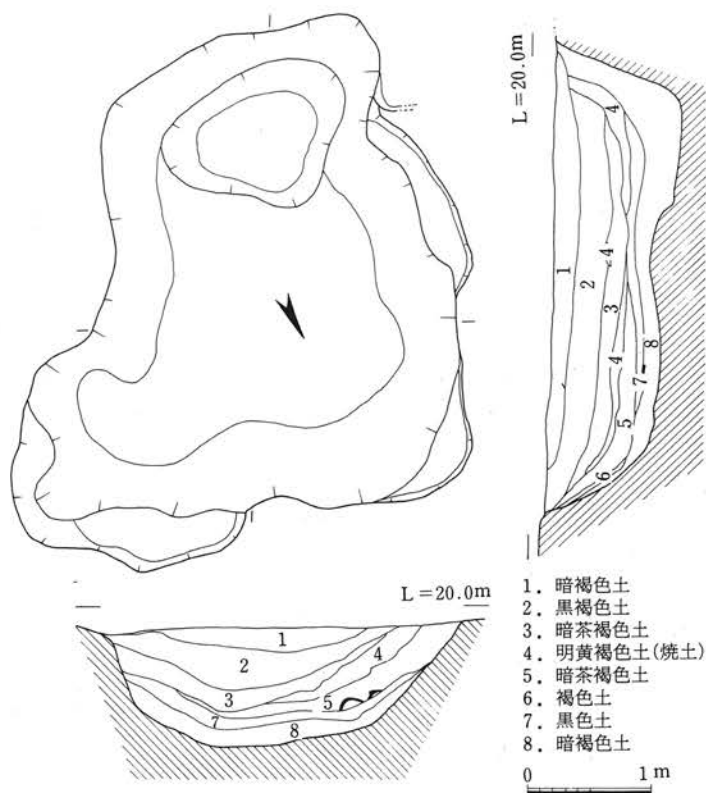


Fig. 25 SK039 実測図 (S = 1/60)

0.8mを測る。遺物も良好な資料が出土している。

S K044 (Fig. 27)

調査区南東部に位置する。長軸4.3m、短軸2.6mの長方形を基調とした平面形を呈している。最深部は0.65mを測る。遺物は全く検出されておらず、時期不明である。

(3) 溝 (Fig. 33)

調査区において検出した溝状遺構は、遺構上面が削平を受けているのか、非常に浅く、長さも短いものが多い。また出土遺物も少ない。その中でS D011・S D024・S D025・S D049は近世のものと思われる遺物が若干ではあるが出土している。調査区南西隅で検出されているS D050・S D053からは、土師器片・須恵器片が検出されており、特にS D050はS K037に切られている。

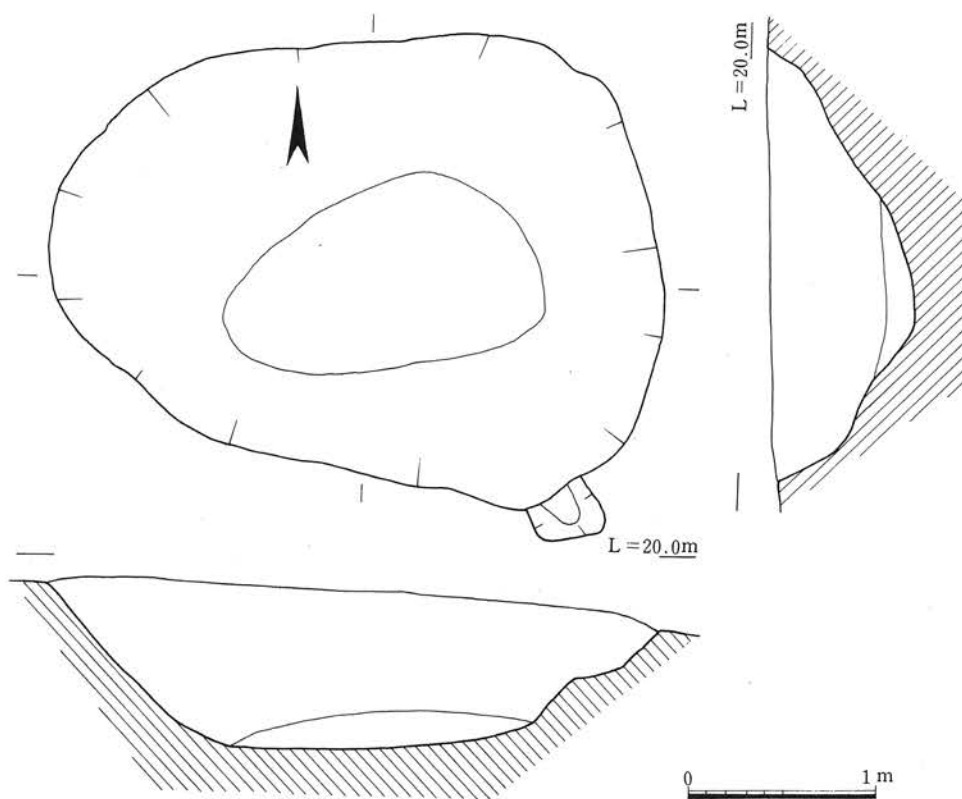


Fig. 26 SK041 実測図 ($S = 1/40$)

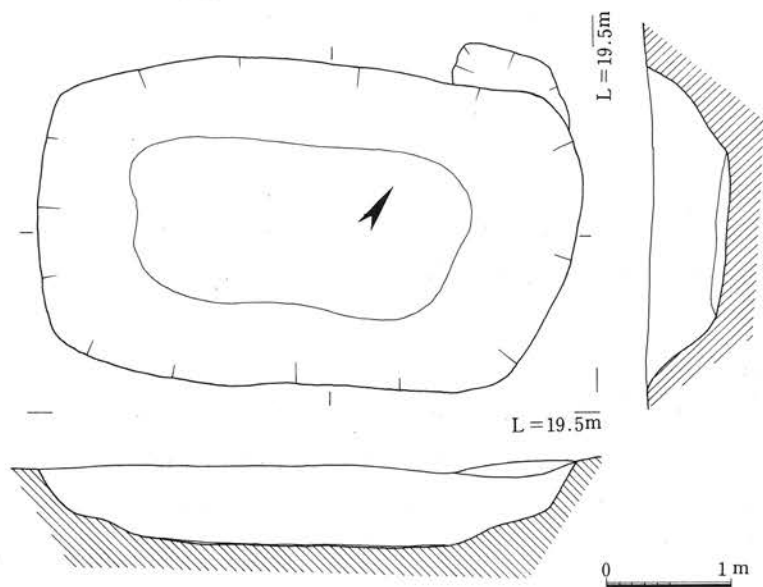


Fig. 27 SK044 実測図 ($S = 1/60$)

2. 遺物 (Fig. 28～Fig. 32)

出土遺物は、奈良期のものと近世のものに大別できるが、全体的に出土量は少ない。2基の土壇は比較的良好な奈良期の一括資料を出土しているが、その他の遺構では出土遺物が少ないかあるいは細片で図化し得なかったものが多かった。以下、時代別に分けて土壇出土の遺物を中心に述べる。

(1) 奈良時代の遺物 (Fig. 28～Fig. 31)

S K039 出土遺物 (Fig. 28、1～22)

坏蓋 (1～7) すべて須恵器である。ほとんどが口縁端部をおりまげるものである。1は復元口径15.4cmを測る。胎土には細砂粒を少量含み、焼成は良好である。灰色を呈する。2は復元口径13.1cm、器高2.5cmを測る。つまみをもち、口縁端部はおりまげずにそのままのびる。細砂粒は殆ど含まず、焼成は良好である。灰色を呈し、口縁部から体部内面にかけて暗灰色を呈する。3は復元口径13.6cmを測り、口唇部外面が若干内湾している。細砂粒を少量含み、焼成は良好である。基本的には灰色を呈するが、体部外面が一部黒変している。4は復元口径15.2cmを測り、器形は若干扁平気味である。細砂粒を含み、焼成は良好である。灰色を呈する。5は復元口径20.5cmと比較的大型で扁平気味の器形である。細砂粒を少量含み、焼成は良好である。灰色を呈する。6は口径20.7cmで5と同様大型品である。口縁端部は平坦面をもつ。細砂粒を少量含み、焼成は良好である。灰色を呈する。7は復元口径21.4cmを測り最も大型である。つまみを欠失している。細砂粒は殆ど含まず、焼成は良好である。灰白色を呈しており、器面は若干磨耗している。1～7の器面調整は、天井部外面に回転ヘラ削り、体部内外面には横ナデ、天井部内面にはナデ調整が施されている。

坏(8) 土師器で、復元口径11.8cm、器高4cmを測る。体部内外面は横ナデ、内底はナデ調整を施す。外底は回転ヘラ切りである。細砂粒・雲母を少量含み、赤褐色を呈する。焼成は良好である。

高台付坏(9～15) 15は土師器でその他はすべて須恵器である。9は復元口径13.9cm、器高3.9cm、高台径10.7cmを測る。細砂粒は比較的少なく、外面は暗灰色、内面は灰色を呈する。10は復元口径14.6cm、器高4.45cm、高台径9.1cmを測り、細砂粒を含む。外面は自然釉がかかり暗灰色を呈し、内面は灰色を呈する。11は復元口径13cm、器高3.6cm、高台径8.8cmを測る。細砂粒を含み、暗灰色を呈する。クロコ右回りである。12は高台径9cmを測る。細砂粒を少量含み、外面は自然釉がかかり暗灰色を呈し、内面は灰色を呈する。13は復元口径14.1cm、器高3.8cm、高台径9.5cmを測る。細砂粒を殆ど含まず、内外面ともに淡黄褐色を呈する。14はほぼ完形で、口径19.6cm、器高6.5cm、高台径12.8cmを測り、大型品である。器面が比較的荒れており、調整の不明瞭な部分が多い。全体は淡黄褐色を呈するが、一部に灰色を呈する。細砂粒を少量含む。クロコ右回りである。法量を考えれば6(坏蓋)とセットになる可能性もある。15は復元口径

13.3cm、器高4.5cm、高台径8.5cmを測り、外器面は灰黒褐色、内器面は明褐色を呈する。器面のあれが激しく調整は不明瞭である。器面調整は9～15とも、体部内外面には横ナデ、内底にはナデ調整が施される。外底はヘラ切離して、10・13には回転ヘラ削りが施される。焼成はすべて良好である。

皿(16・17) 16は復元口径15.2cm、器高2.3cm、復元底径11.2cmを測る。細砂粒を含み雲母も多く含む。体部内外面にはヨコナデ、内底はナデ調整を施し、外底は回転ヘラ削りである。赤褐色を呈し、焼成は良い。17は復元口径19.6cm、器高1.9cm、復元底径17cmを測る。外底は回転ヘラ削り、内底はナデ、体部内外面は横ナデ調整を施す。外底にはヘラ記号がみられる。細砂粒・雲母を含み、焼成は良好である。淡黄褐色を呈するが、外底の一部と内底中央が黒く焼けており、特に内底ではその部分の器面が薄く剝離している。

壺(18・19) 2点とも須恵器である。18は復元口径9.0cmを測る。砂粒を若干含み、焼成は良好である。口縁に受部をもつ。他の類例を知らないが、短頸壺と考える。19は比較的高い高台をもつ。細砂粒は殆ど含まず、焼成も良好である。底部片であり全体器形は不明だが、内器面にはロクロ形成痕のみを残し、他の調整が行われていないことから考えて壺とした。

甕(20～22) 20はゆるやかに外反する口縁をもち、口縁部付近は横ナデ、胴部外面は縦方向のハケ目調整、内面は横方向のハケ目調整の後にヘラ削りする。黄褐色を呈する。21は他より小形品である。口縁部付近は横ナデ、胴部外面はナデ、内面は不明瞭だがヘラ削りと思われる。赤褐色を呈する。22は把手をもち、外面は口縁部付近を横ナデ、胴部は把手を貼り付けた後にハケ目調整を行い、胴部内面はヘラ削りである。黄褐色を呈する。3点ともに1～2mmの粒子を多く含む。焼成は良い。

S K041 出土遺物 (Fig. 29、23～40)

杯蓋(23～27) 24は土師器で他は全て須恵器である。23は復元口径12.5cmを測り、つまみを持っていたと思われる。細砂粒を少量含み、淡灰色を呈する。焼成は良好である。24は復元口径14.9cmを測り、つまみが欠失している。細砂粒・雲母を含み、焼成は良い。赤褐色を呈する。25はほぼ完形品で、口径15.1cm、器高2.25cmを測る。細砂粒を若干含み、焼成は良好である。基本的には暗灰色を呈するが、重ね焼きのためか口縁部外面及び体部内面の一部は明灰色を呈する。26は復元口径15.2cm、器高は1.7cmを測り、つまみをもつ。細砂粒を多く含み、灰褐色を呈する。焼成は良好である。27は復元口径15.4cmを測り、つまみを欠失する。細砂粒を若干含み、灰色を呈する。焼成は良好である。23～27はすべて口縁端部をおりまげるもので、特に25～27については器形の扁平化が著しい。器面調整は、基本的には天井部外面に回転ヘラ削り、内面にナデ、体部内外面に横ナデを施しているが、特に3については口縁部付近に縦方向ナデ、天井部内面には強いナデ調整を行っている。

坏(28～30) 全て土師器である。28は復元口径12.8cm、器高4.0cmを測る。細砂粒・雲母を含み、赤褐色を呈する。29は復元口径12.8cm、器高4.0cmを測る。細砂粒・雲母を含み赤褐色を呈

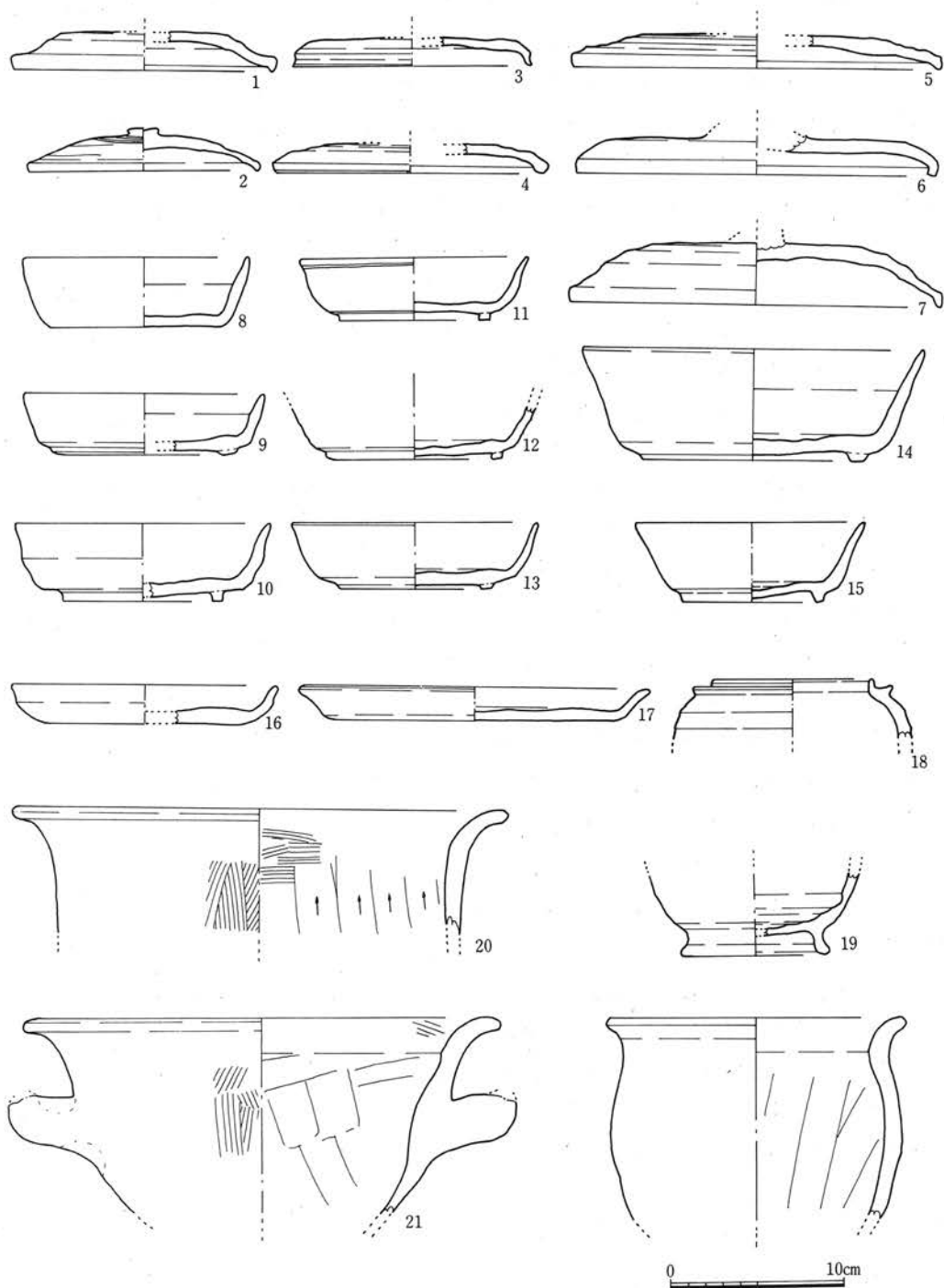


Fig. 28 SK039 出土遺物実測図 (S = 1/4)

する。30は完形に近く、口径14.4cm、器高3.8cmを測る。細砂粒・雲母を含む。底部外面に暗赤褐色の化粧土(?)が認められるが、その他の部分は赤褐色を呈する。器面調整は3点とも外底に回転ヘラ削り、内底にナデ、体部内外面に横ナデが施される。全て焼成はよい。

高台付坏(31~35) 31~33は須恵器、34・35は土師器である。31は口縁部付近を欠失する。高台径は6.8cmを測る。細砂粒を含み、外面は灰色、内面は灰黄色を呈する。32は復元口径13.4cm、器高4.2cm、高台径6.8cmを測る。細砂粒を少量含み、暗灰色を呈する。33は完形に近く、口径14.9cm、器高4.6cm、高台径10.1cmを測る。細砂粒等は殆ど含まない。高台は若干高く、中心よりずれて貼り付けられる。灰色を呈する。34は復元口径15.2cm、器高4.9cm、高台径10.1cmを測る。雲母は含むが、細砂粒は殆ど含まない。非常に丁寧なつくりで、色調は黄褐色を呈するが、外器面には暗赤褐色の化粧土(?)が一部残る。35はほぼ完形で、大型のものである。口径18.4cm、器高6.4cm、高台径12.7cmを測る。雲母を含み、赤褐色を呈する。31~33はロクロ右回りのヘラ切りで体部内外面は横ナデ、内底はナデ調整を施し、34・35は外底に回転ヘラ削りを行う以外は同様の調整が施されている。焼成は良い。

皿(36) 土師器で、復元口径20cm、器高1.8cmを測る。体部内外面は横ナデ、内底はナデ、外底は回転ヘラ削りを施す。雲母を多く含み、黄褐色を呈する。焼成は良い。

高坏(37) 坏部径19.2cm、器高8.2~9.5cm、脚部径11.6cmを測る須恵器の短脚高坏である。坏部は底部に回転ヘラ削りを、底部内面にはナデ、他部には横ナデを施す。若干歪みを生じるが、丁寧なつくりである。暗灰色を呈し、焼成はよい。

甕(38~40) 大小2種がある。38・39は大形品で、口縁部付近を横ナデ、胴部外面にハケ目、胴部内面にはヘラ削りを施し、比較的張る胴部に、強く外湾する口縁部をもつ。40は小形品で、器面調整は他のものと変わらないが、口縁部付近に指頭圧痕をかすかに残す。すべて胎土中には1~2mmの砂粒や雲母を含み、焼成は良い。

S K037 出土遺物 (Fig. 30、41~43)

坏蓋(41) 須恵器である。口縁端部を折りまげるもので、天井部外面には回転ヘラ削り、内面はナデ、他は横ナデを施す。灰色を呈し、焼成は良好である。

坏(42・43) 42は土師器で、復元口径14.4cm、器高3.5cmを測る。細砂粒・雲母を含み、黄褐色を呈する。43は須恵器で、復元口径17.0cm、器高3.5cmを測る。細砂粒等は殆ど含まず、灰色を呈する。2点とも体部内外面は横ナデ、底部内面はナデ調整を施し、底部はヘラ切りである。焼成は良い。

S K043 出土遺物 (Fig. 30、44~46)

坏蓋(44) 須恵器である。復元口径13.4cmを測る。口縁端部は折りまげで、つまみを欠失する。天井部は回転ヘラ削り、体部内外面は横ナデ、天井部内面にはナデ調整を施す。細砂粒を含み、灰色を呈する。焼成は良い。

坏(45) 須恵器である。復元口径12.2cm、器高3.4cmを測る。底部はヘラ切り、体部内外面は



Fig. 29 SK041 出土遺物実測図 (S = 1 / 4)

横ナデ、底部内面はナデ調整を施す。1～2mmの砂粒を多く含み、暗灰色を呈する。焼成は良好である。

高台付坏(46) 須恵器で、復元口径12.4cm、器高3.4cmを測る。底部はヘラ切りで、内底はナデ、体部内外面には横ナデを施す。砂粒を殆ど含まず、焼成も良い。暗灰色を呈する。

SK051 出土遺物 (Fig. 30、47・48)

坏蓋(47) 土師器である。つまみをもち、口縁端部を折りかえすもので、復元口径は20.2cmを測る。天井部には回転ヘラ削り、体部内外面には横ナデを施す。細砂粒を含み、赤褐色を呈する。

坏(48) 土師器で、復元口径14.8cm、器高4cmを測る。底部は回転ヘラ削り、体部内外面は横ナデ、内底はナデ調整を施す。細砂粒・雲母を含み、焼成は良好で、赤褐色を呈する。

その他の遺構出土遺物 (Fig. 31、49～55)

坏蓋(49～51) すべて須恵器である。復元口径13.2～15.2cmを測る。50はつまみを欠失している。3点とも、口縁端部を折りかえしており、天井部外面は回転ヘラ削り、内面はナデ、体部内外面は横ナデ調整である。焼成は良好で、49・50は灰色、51は黄褐色を呈する。

高台付坏(52・53) 2点とも須恵器である。52は口径12cm、器高4.5cmを測る。細砂粒を殆ど含まず、焼成は良い。明黄褐色を呈する。53は復元口径12.5cm、器高3.4cmで、細砂粒を含み、焼成は良い。灰色を呈する。両者とも底部ヘラ切りで、体部内外面は横ナデ、内底はナデ調整を施す。

坏(54・55) 54は須恵器で、復元口径12.3cm、器高3.9cmを測る。底部はヘラ切りと思われ、体部内外面は横ナデ、内底はナデ調整である。焼成は良いが、若干歪みを生じる。暗灰色を呈する。55は土師器で、復元口径14.6cm、器高4.2cmを測る。胎土には1～2mmの砂粒や雲母を含み、赤褐色を呈する。体部内外面は横ナデ、内底はナデ調整で、底部は手持ちのヘラ削りと思われる。焼成は良い。

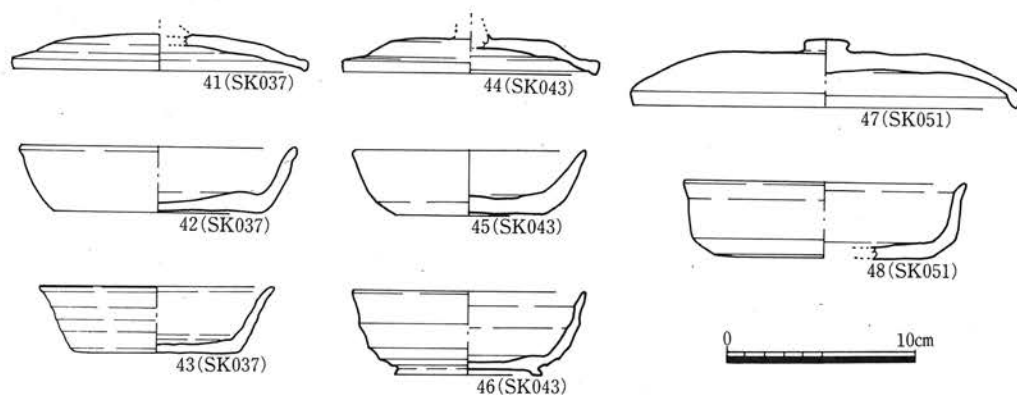


Fig. 30 SK037・043・051 出土遺物実測図 (S = 1/9)

(2) 江戸時代の遺物 (Fig. 32、56～70)

56～59は土師器小皿。すべて糸切り底であり、全体的に器壁は薄い。口径5.2～8.7cmを測り、明黄褐色を呈する。60は陶器壺で口径6.8cmを測る。残存部には内外面とも暗茶褐色の釉がかかっている。61は陶器壺。口径5.7cmを測る。外器面には全面に、また内器面には口縁部だけに暗茶褐色の釉がかけられている。残存器高5cmである。62～64は染付碗。62は口径6.4cm、器高4.2cm、高台径3.6cmを測る。口縁部外面と高台外面に一条の線が、外器面と内底に文様が染付られている。63は底部のみ残存する。高台径6.2cmを測る。内底には花文等が描かれている。64は口径11.3cm、器高6.5cm、高台径5.1cmを測る。外器面と内底には花文等が染付けられている。65は摺鉢。口径29.6cm、器高12.4cm、底径10.7cmを測る。カキ目は9条を単位としている。釉は口縁部のみにかけられている。66は陶器壺。口径24cmを測る。67は甕の底部から胴部にかけて残存する。器面には格子目の叩きが行われており、内面には指頭圧痕が残る。68～70は土師質の盤。口径34.7cm～48.6cmを測る。器高7.1～9.6cm。基本的にはハケ目調整を行うが68は内面にヨコナデを施す。70は外器面に媒の付着が著しい。

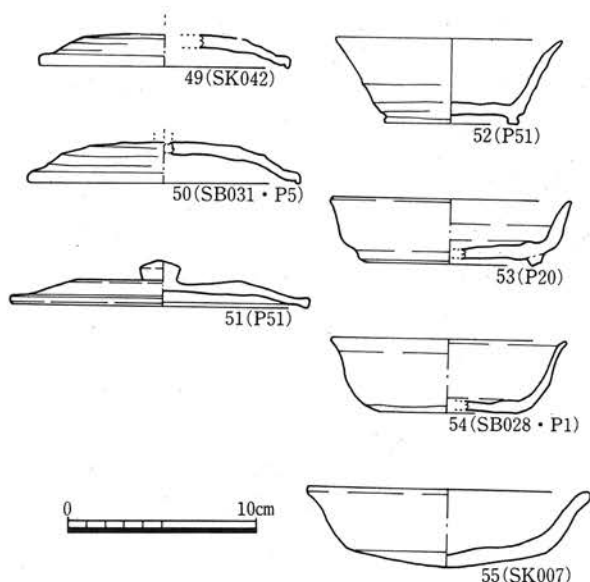


Fig. 31 その他の出土遺物実測図 (S = 1/4)

V. 小 結

今回の調査では、奈良時代と江戸時代の遺構・遺物を検出した。特に奈良時代の遺構・遺物が遺跡の中心をなしており、比較的良好な資料を提供している。

遺構の中で主体となるのは、掘立柱建物跡であり、総数17棟を確認した。柱間寸法については図中に明記したが、一定しておらず、かなりまばらな数値を呈している。約30cmを単位としているようにも思えたが、確実な規格性を見出すには至らなかった。建物の方向性についても、かなりの幅をもっており、方位の近似する建物でグルーピングを行ってみたが、SB022・SB023・SB026・SB058・SB062がほぼN10°Eの方位をもつグループとして認識できた以外は、グループとして捉えられなかった。建物の配置についても現在のところ、さしたる計画性・規格性を考慮しているようにも思えない。ただ、調査区の中央部付近で東西に延びる小穴群が、

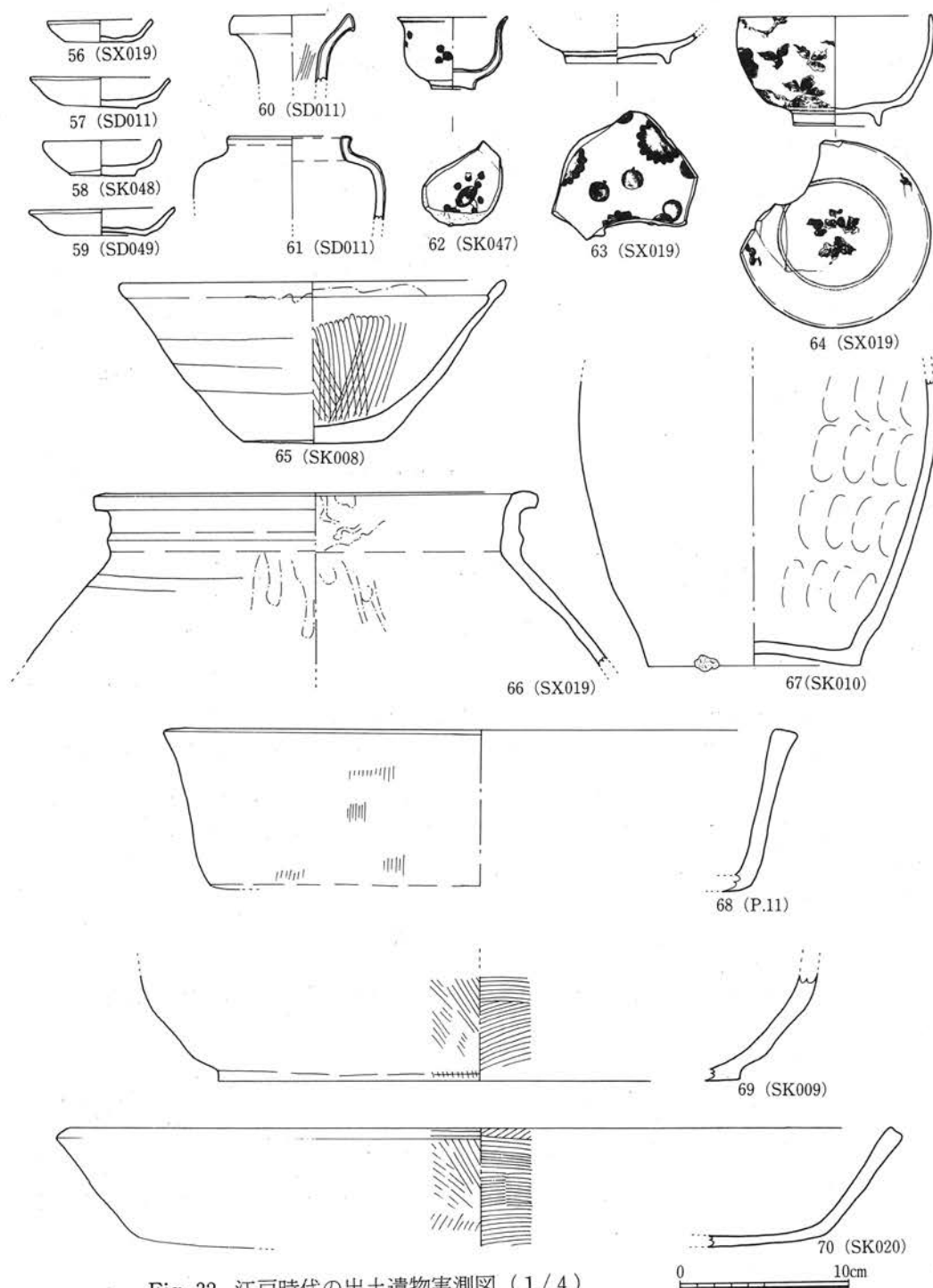


Fig. 32 江戸時代の出土遺物実測図 (1/4)

そこより南に位置し弧状に延びる小穴群が存在しており、柵列の可能性はある。もし柵列とするならば、この柵列が建物を区画していたとも考えられる。建物の時期についてであるが、柱穴出土遺物や他の遺構からの出土遺物、また、奈良時代の所産の遺構が調査区南半に集中していることから考えると、掘立柱建物は奈良時代に営まれたものと考えられる。

土壌は多数を検出しているが、特にS K 039とS K 041の土壌からは、須恵器・土師器が一括出土している。土層の堆積状況や各層出土土器から判断しても大きな時期差はみられない。时期的には8世紀前半に位置づけられると思われる。

この時期の遺跡の類例が調査地周辺では全くないため、遺跡の性格等については断定できないが、特徴的な点をまとめてみたい。

まず、今回の調査地においては、住居としての遺構は掘立柱建物跡を検出している（倉庫と考えられるものもあるが）が、竪穴住居跡は1軒も検出されていないことが挙げられる。当遺跡が一般的な集落跡とするならば、若干奇異な印象を受ける。

また、逆に役所関連の遺跡として性格づけを考えてみても、硯・木簡・墨書土器等の役所的性格を示唆するような遺物の出土がみられないこと、掘立柱建物跡全体の規模や柱穴の規模が比較的大きくなく、建物に統一された規格や配置の計画性が明確でないこと、一部が発掘調査で確認されている古代官道の推定路線は、調査地から南へ約800mほど離れて存在していることなど、否定的な材料も少なくない。

現段階では遺跡の性格を決定するには至らないが、遺跡自体は南へ広がる可能性が高く、今後の調査に期待がもたれる。

次にS K 001、S K 012、S K 044の土壌について述べる。このような隅丸長方形を基調とした遺構は以前に泉三本栗遺跡において「大型土壌」として報告されている。その後、類例も増加しているようだが、その時期・性格については未だ不明である。本遺跡においても出土遺物は土器細片を少量検出しただけで、新しい知見は得られなかった。

江戸時代の遺構・遺物については詳細な検討が行えなかったが、今回の調査により調査区周辺に江戸時代の集落跡の存在が予想される。また、若干の窯道具と調査地の北東部約1.5kmの地点に存在する皿山窯跡から表採された陶器片と類似する陶器片が本遺跡で確認されていることは、この地の江戸時代の様相を考える上で非常に興味深い。

今回の調査は、奈良時代における久保泉地区の様相を解明する上で大きな意義をもつものと思われ、今後の資料の増加が望まれる。

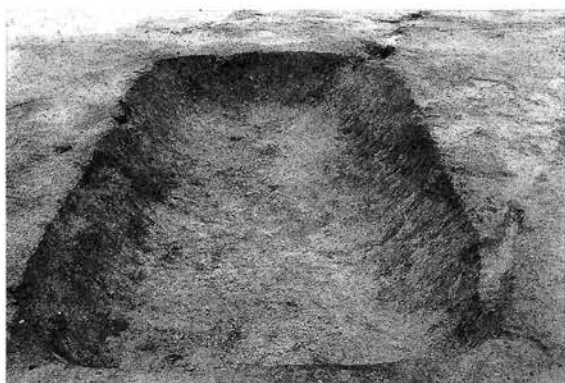


Fig. 33 大日遺跡遺構配置図 (S = 1/320)

図 版



1



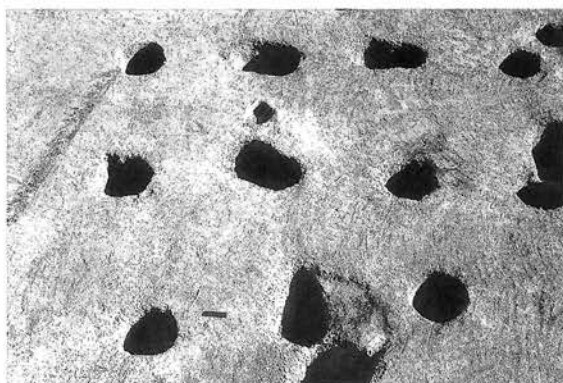
2



4



3



5

- 1 大日遺跡全景
- 2 SK001 (東から)
- 3 SB028 (南から)

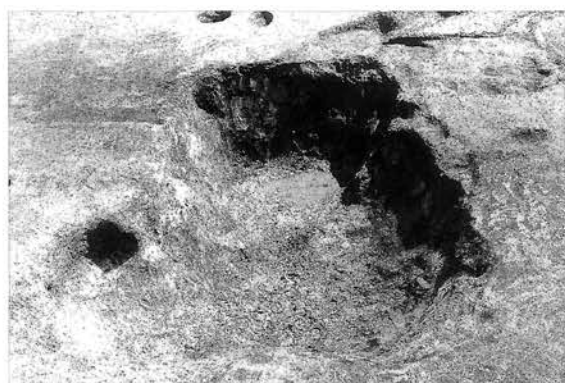
- 4 SB029 (南から)
- 5 SB031 (北から)



6



9



7



10



8

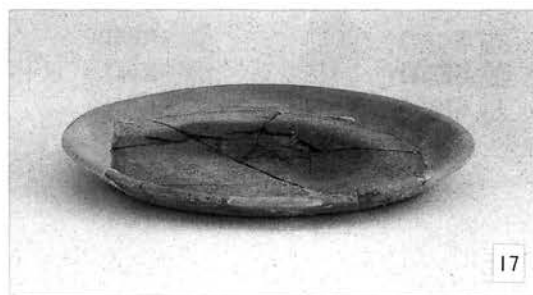
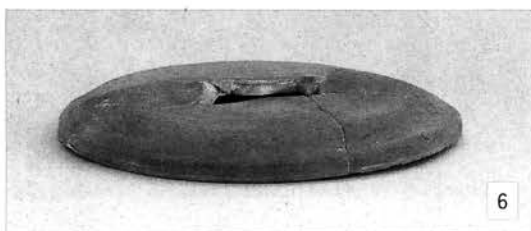
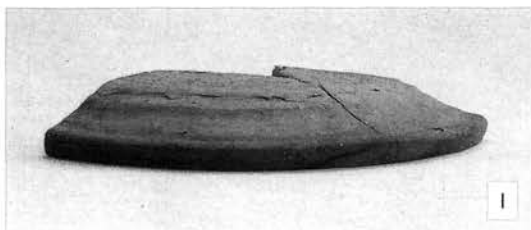
6 SB033 (南から)

9 SB062 (南から)

7 SB039 (南から)

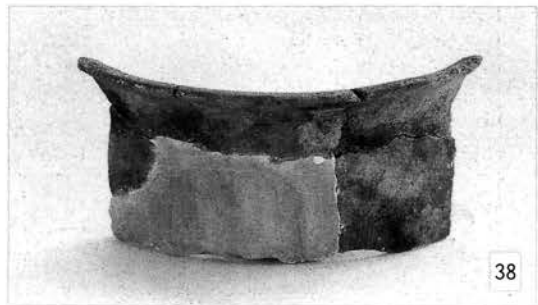
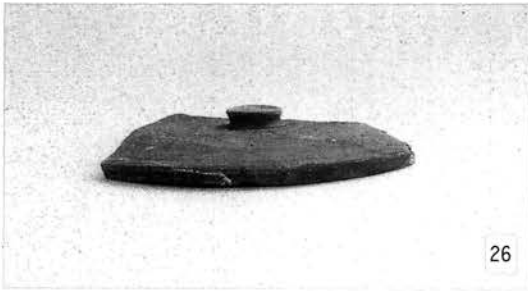
10 SB063 (北から)

8 SB058 (北から)



- 1 SK039
- 2 SK039
- 3 SK039
- 6 SK039
- 7 SK039
- 10 SK039

- 11 SK039
- 13 SK039
- 14 SK039
- 17 SK039
- 25 SK041



26 SK041

30 SK041

33 SK041

35 SK041

36 SK041

38 SK041

佐賀市文化財調査報告書第25集

大 日 遺 跡

平成元年 3 月31日

発行 佐賀市教育委員会
佐賀市栄町1番1号

印刷 (株) 宮 地 印 刷
佐賀市長瀬町11-20